

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教玄月



第八十三卷第三号
日本幼稚園協会

3

幼児の動きのリズム

新版 自由表現ABC

子どもの創造性を育てる自由表現

感情のおもむくままを自分の体の動きで示す自由表現は、子どもの創造性を育てる第一歩になります。

本書では、子どもの単純な自由表現から出発し、それを発展追求して肉づけし、最終的には舞踊劇の作品に仕上げるまでをわかりやすく解説しました。

振付け、楽譜をつけ、保育者の方々が使いやすいよう編集してあります。

(全国学校図書館協議会選定図書)

藤田妙子・著

B5判・128頁・定価1,300円

新版 幼児の生活とカリキュラム

三層構造の生活プラン

子どもの社会性と集団を育てるために

カリキュラムは形だけつくったのでは意味がありません。園生活において、子どもたちの生活がどのように展開されていくか、その方向づけをするものであってほしい。

著者は子どもたちの園生活を、「課題活動」「遊び」「生活の仕事」の三層でとらえ、実践を通じて、子どもの生活集団と社会性の発達をあとづけていきます。

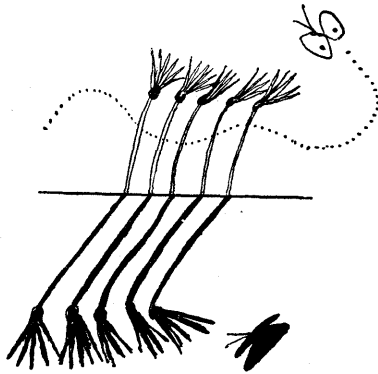
大場牧夫・編著

B5判・216頁・定価1,800円

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



第八十三卷 第三号

幼児の教育 目次

— 第八十三卷 三月号 —

© 1984

日本幼稚園協会

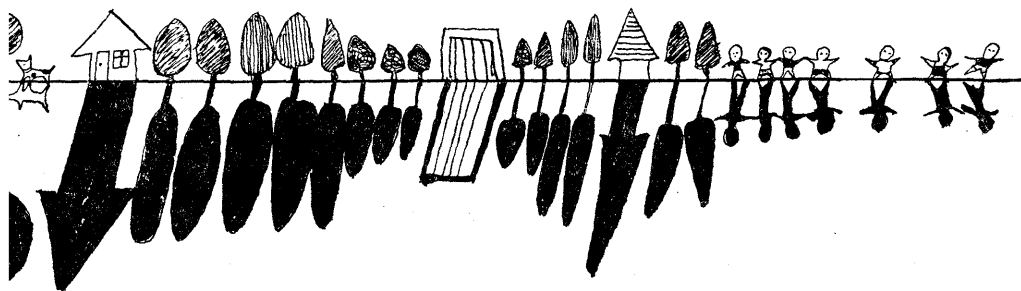
遙けきかな……………日名子太郎…(4)

幼少時の談叢……………山西 貞…(6)

近代短歌に現われた子ども(十七)……………大塚 雅彦…(14)

穴の向うの世界……………立川多恵子…(22)

韓国幼稚園教育(二)……………李 相琴…(26)



まわるものへの関心……………津守 真…(37)

いろいろなことを教えてくれる子どもたち②…村石京子…(42)

子どもの作文から……………(45)

遺伝と環境

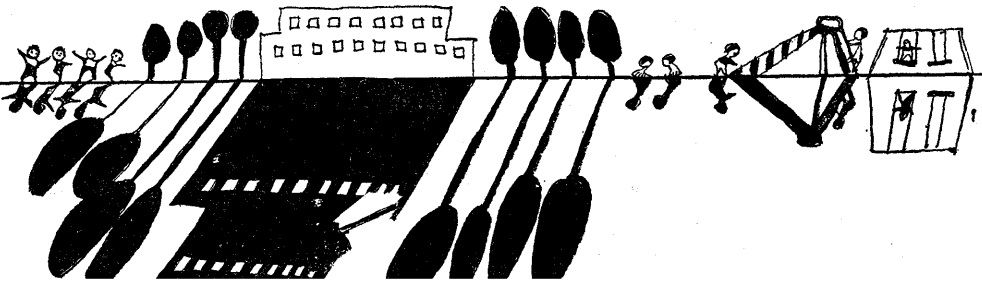
——D・フリーマンのM・ミード批判に寄せて——

……………足立寿美…(46)

ニュージーランドにおける就学前教育の

歴史ならびに現状(五)……………松川由紀子…(55)

表紙 紙 安井 淡
表紙題字 比田井和子
カント 福田 理恵



遙^{はる}けきかな……………

日名子 太郎

大学時代の敬愛する恩師M教授から「君、保育の世界に入
って何年になるネ?」と突然たずねられたことがあった。そ
の頃、私は、丁度、老学生として十数年も年の若い同級生た
ちと共に心理学を学びつつあった。つまり、保育の世界に入
って僅か六、七年後で、M先生から、ヒョコ扱いされたわけ
である。それから二十年余の時間が流れ、教授引退パーティー
の席上で再び先生から全く同じ質問をされた。私のやつと二
十七年目になったという答えをきかれるや、先生は、「はア、
やつと半分だネ」とつぶやかれるのを聞いて、「先生は、前
にも同じことを質ねられましたか、何故ですか?」と反問す
ると、「君ね、人生、どんな人でも五十年同じ道をしつかり

歩けば、何とか一人前になれるよ、五十年ネ……」

ところで、現在の私は、保育界でやつと三十五年を経たば
かりで、先生のいわれる五十年にはあと十五年あるわけだ
が、そこではたと気が付いた。この五十年という目標を達成
するには、まず長生きをしない限り不可能という事実であ
る。幸い、日本人男子の平均寿命は、七十五歳とかいわれる
ようになったが、これには個人差もあり、第一そこまで生き
られるかどうかわからないし、仮りにその平均寿命に無事達
したとして、それだけで満願成就というわけではない。その
間、ただ生きているのではなく、それなりの道を歩むことが
必要なのだから決して容易なことではない。

一昨年、初孫の男の子、そして昨年末に二番目の孫の女の子が生れ、人並にじいになり、老妻ともども毎日、孫たちの実に精神的な生命力あふれる姿に接していると、保育とは何か、いかにあるべきかという年来の課題を今さらに、改めて考えさせられる。特に、二番目の孫の出産に際して、母親の約一週間余りの不在が、生後一年十ヶ月の孫にとって、彼の人生初の大変な経験であり、その間の彼の様子を間のあたり見ながら実際に保育してみると、親の一方的な都合ばかりで軽々しく施設保育を論じることへの疑問を前よりも一層つららせ、これまた、施設保育のあり方について考えさせられることになった。

もし、目標年数満願成就の頃まで無事であれば、この孫たちが、中学校を卒業するわけだが、その頃には、老人など生きていない方がよかったと思うような姿に変わっているかも知れないし、そうでないかも知れない。

最近のエレクトロニクス技術の急速な発展は、本当に秒刻みで行なわれており、それが一体、人間の成長・発達や社会構造の変化にどのような影響を与えるかはその道の専門家と

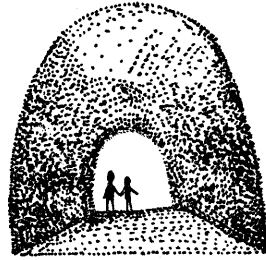
いえども予断を許さないものがある。この辺に、今日の若い夫婦が子どもを生まない理由の一つとしての「将来へのなんとなし、不安感」の源があるように思う。このような先行不安に原因する出生児数の減少は、推計能力の範ちゅうを超えていたからこそ予測できなかったであろう。

私は、保育学とは、未来学の一つであり、今、乳幼児を保育するということは、彼らの将来生きていくべき世界を予測しつつ、判断し、体系化していかなければならないものと思つてゐる。その為には、コメニウスやポルトマンの述べているように、人間は何故、胎児期が短かくすべて早産ともいえる状態で生まれなければならないのか、また何故乳幼児期がどのように頼りなく幼くなければならないのか、そして成人するまでなんで長い期間を必要とするのかという点に目を向け、それがすべて他の動物とは異なる実に複雑な生活への適応を迫られるからであるということの認識が大切である。

この認識あつて始めて現在の保育に処することができるといふことのわかるには、やはり五十年は必要のようである。因みに、初孫の名前は「遙はるか」という。(玉川大学)

幼少時の談叢

山西貞



はじめに

私は熊本城のすぐ下の京町という所で、ひどい雷雨の日に生まれました。私が雷や地震などに人一倍憶病なのは、生れた途端に大きな雷鳴に驚かされたからだだと母にいわれました。父は軍人で第六師団（今の熊本城）に勤務して居りましたので、学令前までここで過ごしまし

た。

幼稚園はその頃あったのかも知れませんが、私は専ら家族の中で過ごしましたので、この頃の幼な友達と云える人は一人も居りません。

家には父母、祖母、叔母をして二才ずつの間隔で長兄、三人の姉、一人の妹がおり、そのほか女中さん一人、父の馬を世話する別当（馬丁）さんが一人任んで居りました。

母は妹が生れた時結核にかかってしまいましたので、妹は叔母に、私は祖母に守られて一緒の部屋に寝ていました。朝、目を醒ますと、時々ミカンが枕元に置いてありました。「これは仏様が下さったのだよ」と祖母が言いながらむいてくれたのを床の中で食べたことを覚えています。私の宗教心はこの様なことから芽生えたように思います。今思えば、仏壇に供えてあった御飯を食べに来た鼠が落して行ったミカンだったのでしょう。

私は無器用で、御飯を食べるのが下手で、そこら中、御飯をこぼしてしまいました。「今に手が生薑しょうがの様になってお茶碗が持てなくなつて御飯も食べられなくなるよ」と皆に云われていました。「本当かしら」と小さいながら訝ったのですが、或時、本妙寺に連れて行かれ、生薑の様に指先がなくなつてモコモコした手を差し出しているお乞食さんが何人も並んでいるのを見たとき、「あんな手をした人が居るのだから、やっぱり本当なのだ」と幼い頭で単純な理論をつけ、信じるようになりました。それ以来あまりこぼさなくなりました。当時、熊本には頼の

人が多く、加藤清正を祭つてある本妙寺には、清正公様セイシウキョウマツの御利益ゴリキがあると云われ、顔や手足のくずれた癩患者が乞食となつて並んでいたのです。

私の四、五才の頃だつたと思います。或雨のそほ降る日のこと、叔母は私に妹と留守番している様にと云い残して買物に出かけました。暫くして私はつまらなくなつて、叔母を迎えに行こうと思ひ立ち、妹に気付かれないう様にそつと家を出て、どンドン市場の方に歩いて行きました。途中で帰りがけの叔母に出会つた時、一寸振り返ると妹がいつの間にか附いて来ているではありませんか。叔母は怒つて妹だけ抱いて足早やに歩いて行つてしまいました。私はおくれて、ぬかるみを裸足になつて追いかけ、やつと家に辿りついたと思つたら門は固くとざされていました。力一ばい開けようと思ひましたが開きません。云いつけを守らなかつた懲とがしめに閉め出されたときとつて、私は声を限りの大声で泣いていましたら、やつと祖母が開けに来てくれました。

妹と私はいつも一緒に育てられましたのでよく喧嘩も

したようです。何が原因だったか定かではありませんが妹が竹の棒を持って私を追い廻し、家の者達がやんやと囃す中を一生懸命逃げ廻った覚えがあります。一緒に小学校に通うようになってからは、きょうだい中で一番仲よしになりました。小学校の先生から「二人はいつも一緒に戯れ合っていて喋々の様だ」とよく云われました。女学生になって妹は東京府立第三高女（現、駒場高校）、私は第六高女（現、三田高校）でしたが、行きも帰りも家から渋谷の間は毎日待ち合せて一緒に通いました。そんな妹が四年生の時、結核になり他界してしまいました。その時の悲しみは私の勉学にひどく影響しました。多摩墓地に埋葬の時、私は真げんに考えました。「死んだら同じお墓に入ろう。それには結婚しないことだ」と。

スリルと恐怖

父の転任で私は小学校に入る直前に東京に来ました。

家は三軒茶屋でしたが、父の考えで、評判のよかった目黒町大橋にある菅刈小学校に入学しました。三軒茶屋から大橋まで玉川電車（当時路面電車）、帰りは大いすぐ上の姉と歩いて通いました。私は玉川電車が向うから走って来るのを見ると「見ててごらん」と云って突然走り出して近づく電車の前を横切って見せるのが得意でした。姉はその度にヒヤッとさせられたと今でもよく話題にします。今思えば全く危いことをしたものだゾッとしますが、その時はスリルがありました。ところが二年生の夏のことです。私は後から来たオートバイにはねられ、しばし気絶しました。幸い家のとりつけの魚屋さんの店先だったので、魚屋さんは私を抱いて家まで運んでくれました。オートバイの青年も家まで来てくれました。玄関に入った時は少しも痛みを感じませんでした。叱られると思ったので「何でもないと頑張りました。が、「兎に角、病院で見て貰わなければ」と無理矢理に赤十字病院に連れて行かれました。診察の結果左肩の鎖骨が折れていることが判り、治療室に入れられました。

その治療処置の激烈な痛みは言語に絶しました。「治療の間中、病院が倒れる様な大声で泣いた。」と後々まで語り草になりました。不幸中の幸でも申しましょるか、オートバイの青年はN侯爵の御曹子で、新しく買ったオートバイの練習中だったのだそうで、ずい分手厚い償いをして頂きました。全快祝いには御殿の様な立派な西洋館のお家で、すばらしい御馳走を頂きました。質素な軍人の家庭で育った私は夢心地でした。私の幼少時の色鮮やかな思い出の一コマです。

オートバイに轢かれた後、暫くは極度に憶病になりました。自転車が来るのを見ても、サッと電信柱（その頃は道の両側に沢山立って居ました）の所に走ってゆき、自転車が通り過ぎるまで電柱にかじりついて動きませんでした。それを見て姉達は「大丈夫よ、大丈夫よ」と云って笑いました。

大正十一年九月一日、小学校一年の夏でした。関東大地震が突然東京を襲いました。母を囲んで皆でお昼御飯を食べていた所でした。震度7だったと言われています。

から、それは凄じいものでした。気がつくとは私は一人、庭に飛び出していました。母が姉や妹を両手でかばいながら部屋の中から私を呼びました。私は縁側えんがわからはい上ろうとしますが、ひどく揺れてなかなか上れません。必死の努力でよじ上れた時は母にしがみついてワンワン泣きました。この時のショックは非常に大きく、恐怖は私の体全体にきざみ込まれてしまいました。寝ていても僅かな地震で反射的に飛び起きてしまいます。後年女学校の教壇に立つようになってからも地震は一番の苦手でした。生徒達に口では「大丈夫です。落ち着いて。」などと云いながら顔から血がひいてゆくのが自分でも判りました。「先生、あの時は真蒼でしたよ。」と後で生徒から笑われる事もあって全く恥かしい思いをしました。小さい時受けた強い恐怖は理性ではどうしようもない程、根強く残るようです。

馬と鶏

私は生来、動物が好きです。

熊本に居た頃、私がニンジン馬小屋に持って行く馬はやさしい眼をして鼻を鳴らしました。馬丁さんに抱かれて馬にニンジンを食べさせるのがこの頃の楽しみでした。東京に移った時はもう家の馬は居ませんでした。菅刈小学校に通う道すがら私はよく荷馬車を曳いた馬に出会いました。時々大きな荷物を山の様に積んでいる荷馬車がありました。はずみをつけて一気に坂を駆け登ろうとする馬が途中で力尽きて、ひと休みすると車はズルズルと下に戻ってしまい、馬はハァハァ喘いでいました。馬追いの人が罵声をあびせながら馬のお尻を鞭でビシビシたたいています。その度に馬は又馳け登ります。そんなことをくりかえしている中に馬の黒い瞳から涙が流れているのを見ました。熊本では馬の笑う顔を見たことがありますが、馬が泣くことをこの時はじめて知りました。長い睫毛の黒い大きな目から涙を流している馬の顔は、何故か今でも時々思いだされる幼い日の記憶です。私は白馬物語とか、子供向け番組でも馬の出る来る

テレビを今でもよく見ます。馬は本当に可愛い動物だと思います。

小学校二、三年頃、家に鶏を五、六羽飼っておりました。生みたての卵を母が必要としたからです。その中に一羽の雄おんどりが居ました。王冠の様な立派な鶏冠トウカで、赤い大きなネクタイをつけている様な大変風格のある白色レグホンでした。この鶏は、特に私に馴れていました。私が膝の上に抱いて胸を撫でてやると眼を閉じてじっとしていました。毎朝私が鶏小屋を開けてやると飛び降りて来て、一声コケコッコと挨拶をしてから舞扇まいおうぎの様に片方の翼をパッと下に向け広げます。そして私のまわりをぐるっと廻って地面に円を画きました。いつも世話をしていた私にだけやって見せる挨拶でした。あんな小さな頭で、ちゃんと考えているのです。私は自分の心がこの鶏に通じる様な気がして、悲しい事があった時などよくこの鶏と遊んでいました。私は今でも神社の境内などで放し飼いの鶏を見ると「とうー、とと」と呼んで見ます。でもあのレグホンと違って、只怪訝な顔をして頸を

傾けるだけで寄って来てくれませんか。もう少し暇になったらチャボ位飼って見たいと思っています。

父と母

父は厳格な軍人で、兄にはスパルタ教育で極めて厳しかったのですが、私はあまり叱られた覚えがありません。けれどやはり威厳があつて子供の私にはこわい存在でした。そんな父が東京に転任してまもなく、母が杏雲堂病院に入院した日、いつもより早目に帰って来ました。そして大きな鉄鍋と牛肉や野菜をひろげてスキ焼の用意を始めました。母を病院に見送って、隙間風が吹いている様な冷たい淋しい気持ちになっていた私は、皆でスキヤキを囲んでいる中に、身も心も温められたことを思い出します。父は表面は厳しいけれど、とても優しい人なのだと子供心にも思つたのです。

母は数ヶ月の入院の後、家に帰って来ました。母は人一倍優しい人でした。体が弱かったのに献身的に子供達

を育ててくれました。母は時々渋谷の方まで買い物にかけていましたので、私は小学校の帰り道、一緒になることがありました。そんな時「お腹が空いた」と申しますと、母は人通りの少ない木蔭に入って、風呂敷からお菓子やバナナなど出してくれました。本当に甘い母親でした。母から叱られた記憶も殆どありませんが、母のよく言っていた「軍人の妻は質素にしなければならぬ。下の人達を大切にしなければならぬ。」という言葉はよく覚えています。母は御用きぎの人達にも大変親切でした。私は小さい時から作文はあまり得意ではありませんでしたが、母のことをテーマにすると、とび切りよい点が頂けました。その作文のむすびには「私は母が大好きだ、母は子供を人一倍溺愛する。決して賢母ではない。でも私の母は日本一の母だと思う。」というような事を書きました。母は私が女高師を卒業した年の冬に結核が再発して亡くなりました。母の死後、母の日記の中に一ヶ

所だけ墨筆で黒々と書かれている事がありました。私の就職が地方でなく、東京のフレンド女学校に決つたとい

うことでした。当時は文部省の命令でどこにでも行かなければならない様な時代でしたから母は内心随分心配していたのでしよう。

小学生の私

最後に私の小学生生活を思い出して見ます。一年生から三年生まで男女組でした。一年の終りの学芸会で桃太郎になりました。緋色の袴をつけて日の丸のついた長い旗を持って、「お腰に附けたキビ団子、一つ私わたしに下さいな。」と手を出すお猿さんや犬さんに紛した男の子にキビダンゴをあげた事など楽しく思い出されます。男女組だったのに何故なぜ私が桃太郎になったのだろうと、今思うと不思議です。

四年生から、家が上目黒に移り、小学校も烏森小学校に変わり、女組になり、段々おとなしくなりました。

昔の小学校は授業時間中勉強するだけで充分だったようです。家に帰るとすぐ近くの練兵場に妹達と飛び出し

て行って走り廻ったりボール投げしたりして遊びまわりました。練兵場は大変広くて起伏や崖などもあり遊ぶのには絶好の場所でした。疲れると木蔭で兵隊さんの吹くラッパを聞いたりで、夕食までの時間は忽ちたちま過ぎて行きました。夕日の沈みかけた空は大変綺麗でした。「夕焼け小焼けで日が暮れる」とか「鳥かかしがなくなるから帰ろ」など歌いながら夕飯を楽しみに帰ったものです。日曜はきょうだいと多摩川遊園地によく出かけました。私はブランコをこぐのが得意で妹を乗せて、水平近くまで漕いで、妹を酔わせ兄からひどく叱られたことを思い出します。

小学校で苦手なのはお裁縫でした。五年生の時は浴衣も縫いましたが、提出したら先生が「これはお角力さんの浴衣のようですね」と云われ、苦勞して縫った脇縫を全部ほどかされました。五センチ位の縫代にすべき所を一センチにしていたのでした。情なかつた思い出です。

夏休みの日記帳の宿題でも苦勞しました。二、三日しかないという時から書き始めるので、姉達を総動員してぎりぎりに書き上げるといふ始末でした。「なぜちゃん

と毎日書いておかなかったの」と叱られるのですが、毎年、同じことを繰り返していました。泥縄は今でもなおらない困った習性です。

結び

三つ子の魂百までとよく云われますが、小さい時、近く電車の前を走って横切った時の気持は、私が女学校の先生をやめて北大に進んだ時とか、外国留学や海外に仕事に出かける時などに持つ気持と通じる所があるように思います。

私は小さい時歌ったうたの中で、「泣きの涙の青い鳥、お前の生れは何処どこの国、オランダ、スペイン、イタリアか、南の南の暑い国」というのがふつと出て来ることがあります。私は南の国が好きで、今までにスリランカに八回、インドネシア、シンガポールなどに数回出かけしています。これは、幼い日を思い出させるこの歌せうたの故ゆゑでしょうか、それとも私が日本の南、熊本で暑い夏の日に生

れた故ゆゑでしょうか。

今年もまた、暮からお正月まで、スリランカに、一月半ばかり四月までインドネシアに、渡り鳥のように南の国に出かけます。

〔著者紹介〕 やまにし・てい。一九一六年七月十日生れ。東京女高師を卒業後、普通土女学校教師を経て、一九四三年、北海道大学農学部に進む。一九八二年まで、お茶の水女子大学教官を勤める。緑茶・紅茶のフレイバー（香り）研究の第一人者として世界を舞台に活躍。「テイ（真）・山西」と異名をとり、フレイバーの絶妙な分析アナリシスは、鼻リンスともいわれる。退官記念の御本に『香りへの道』がある。



近代短歌に現われた子ども
(十七)



大塚 雅彦

(37) 宮柁二

宮柁二は本名肇^{はじめ}、大正元年、新潟県北魚沼郡堀之内町に生まれた。生家は「丸^{まる}末^{すえ}」と号する書籍商であった。父は「三峽」という雑誌を発行し、文学を好んだ人物といわれ、また、叔父の宮芳平は森鷗外の短篇「天籠」に出てくるM君のモデルという。柁二は昭和五年県立長岡中学卒業、同七年家業を捨てて上京、新聞配達員、額縁店員、出版社員等を転々した後、同八年四月府下の砧村^{きねた}に北原白秋を訪ね、その門下生となった。同九年宮一家も没落して移住し、横浜市鶴見区に住むに至った。柁二は同十年六月に「多摩」を創刊した師の白秋の秘書として、八月から白秋居に通った。同十四年三月白秋のもとを辞し、六月富士製鉄川崎製

鋼所（のち日本製鉄に合併）に入社した。八月召集令状を受け十一月大陸に出征、中国山西省方面に転戦、十七年師の白秋を喪ったが、十八年九月戦地から帰還、翌年結婚したが二十年六月再び応召、茨城県で終戦を迎えた。復員後、横浜の自宅に帰り引き続き製鋼所に勤務したが、二十五年東京日本橋の本社勤務に転じた。昭和三十五年永年勤めた富士製鉄を退職し、文筆一本の生活となり今日に至っている。なお、昭和五十一年十二月脳血栓で倒れ、爾来療養につとめ、健康が充分でない。

柗二は中学在学中に相馬御風の「木蔭会」の同人で滝沢という人物にすすめられ、同会に入り作歌を始めた。白秋門に入ってからその「多摩」会員としてはげみ、戦場にあっても作歌を廃さなかったが、この戦場詠が後に『山西省』として洛陽の紙価を高からしめるのである。戦後昭和二十二年に「新歌人集団」「東京歌話会」等に加わり、新進気鋭のすぐれた抒情歌人として次第に名を成した。同二十七年に「多摩」は解散されたが、翌二十八年三月柗二は「コスモス」を創刊し、以後その主宰者

として今日に至った。同誌は昭和五十八年八月「創刊三十周年記念大会」を盛大に挙行したが、「アララギ」と一、二を争う歌壇最大の結社として成長している。柗二は昭和三十年四月から「朝日歌壇」の選者となり、今日も続けている。なお、昭和五十八年十一月、日本芸術院会員となった。歌集は『群鷄』（昭21）、『小紺珠』（昭23）、『山西省』（昭24）を始め最近作の『忘瓦亭の歌』（昭53）に至るまでの九冊と青春歌集『若きかなしみ』（昭55）の合計十冊があり、このうち、『多く夜の歌』（昭36）は第十三回読売文学賞を、『独石馬』（昭50）は第十回逍空賞を受けた。更に昭和五十二年にはその業績により第三十三回芸術院賞を、五十六年には紫綬褒賞を受けている。このほか『新選五人』（昭26）のような合著歌集や、全歌集の類に『定本宮柗二全歌集』（昭31）——第十一回毎日出版文化賞受賞、『完本宮柗二全歌集』（昭46）、『定本宮柗二短歌集成』（昭56）があり、自選歌集『小現実』（昭46）等もある。著書もすこぶる多く、『埋没の精神』（昭30）、『机のチリ』（昭45）、『私の棚の中』

(昭50) のようなエッセイ集、『石梨の木』(昭49) のような歌論集、『雪の里』(昭52)、『忘瓦亭日録』(昭53) のような随想集、『短歌続本』(昭49)、『短歌実作入門』(昭57) のような入門書、『西行の歌』(昭52)、『鑑賞』小倉百人一首』(昭54) のような古典物、『万葉大和の旅』(共著、昭49) 等、多岐にわたっている。

終二の人及び作風の特色をどう把握したらよいであろうか？ 彼は『群鷄』の後記に、師の白秋から「君は暗い」「君は何故孤独なのだ」「君の歌は瘤の樹をさするようだ」と言われたことを書きとどめている。「私は常に不安を曳きつけて作歌して来た」とも述べている。また『小紺珠』の後記にも「私は常に孤独に住んで常に孤立するとき生き方をして来た」とある。彼が「孤独派宣言」というエッセイを『短歌雑誌』に書いた(後に前掲書『埋没の精神』に所収)のは早く昭和二十四年である。その中に「文学というものは、発想の中に抵抗が含まれなければ、自立しないのではあるまいか」「かの人間の弱さを、いかに作家の誠実として抵抗に設定してゆ

くか。そうしたところを通してゆく孤独のたたかいを必要とするだろう」とある。彼を有名にした『山西省』の中に「おそらくは知らるるなけむ一兵の生きの有様をまつぶさに遂げむ」という作品があり、『小紺珠』の中には「英雄で吾ら無きゆえ暗くとも苦しとも堪へて今日に従ふ」という歌がある。

これらの資料を総合して勘考してみると要するに、一人の無名の庶民、苦しみつつ孤独に堪えて誠実に生きる民衆の生き方に徹しようというという態度があり、そこから発するつねに人間性を刻印した詠嘆の深さが、読者をとらえてやまないのではないかと思われる。彼の弟子安立スハルは「英雄の反対の側に立つて耐え忍ぶ勁さ」「生への祈り」ともそれを形容している(「コスモス」昭42・1所載、安立『埋没の精神』をどう考えるか)。上田三四二は、終二の短歌にはつねに「硬質の文学性がある」と言い、「氏は人生を(悔しき)として受け取った。人生とはいかにも口惜しいものではないか。……：悔しみの文学——宮氏の文学をそう呼ぶことが出来るだ

るう」(上田『現代歌人論』昭44・12)と論じている。

筆者などが終二の文学に惹かれる原因もそこにあるらしい。「宮が戦後の日本人としての歩みを敗戦後の復員から始めたように、私の戦後生活の原点はあの戦争の終わった暑い八月であった」と私自身が書いた(「短歌」昭56・8所載、拙稿「たたかひの前と、そののち」)のも、そんな彼の生活感情や作歌精神に共感するからであり、「戦争を観念ではなく自身の身体で確かめて来た作者が、戦後を身をもって体験し、歌人として生きるという、もつとも困難な道を選んだ」(島田修二『宮終二』昭55・11)彼の生き方にアイデンティファイできる思いが強いからである。

① 生きゆかむ苦しさ知らず陽に灼けし畳のうへに子は眠りをり

② 咳病みて顔の小さくなりし子と妻言へば来て妻と見下す

③ ながらるるごとき感じぞわれの子がわれを心に置かぬ所作する

④ 阿りをいふ子きらひと言ひさしてふと見れば溢るるばかりの泪

⑤ 人を傷めぬよき子になれと中の子の広き額を撫でてをりたり

⑥ 消極の子の生にしもをりをりは光る泪のごときもあらむか

⑦ おとうさまと書き添へて肖像画貼られあり何といふ吾が鼻のひらたさ

⑧ 扱きつつ新聞を鳴らし配りゆく少年の力も見通したまふな

⑨ 馬跳びの子らの遊びを見おろすに馬として待つ子の背の孤独

抄出歌はいずれも私の大好きな佳吟ばかりであり、子どもに対する愛情の溢れた忘れがたい作品ならぬものはない。①は『小紺珠』所収。「周辺詠物」一連の中にある。終戦直後の物心共に苦しく混沌たる日々の中で作られた歌だ。陽に灼けた貧しい家の畳、その上に、これからの長い人生に来るべき生きの苦しきも知らぬげに眠っ

ている子、それを見ている父である作者。

②から④までは歌集『晩夏』(昭26)より抄出。②は「風の夜」一連にある。作者、妻、子と次々に病んだ、と詞書にある。昭和二十年代で、良い薬もなかったのかもしれない。咳を続けて病臥している子——それをやると咳の癒った父母(作者夫婦)が枕辺に来て、「かわいそうに、あんまり咳を続けたので顔が小さくなったねえ」とでも言い交しつ、見下ろしているのだろう。一読、涙のにじむような作品だ。この一連には「世の生にもっとも拙き親子かと火を熾しつて俄かに可笑し」という自嘲をベースに包んだ作品もある。③と④は「をさな子二人」一連の中にある。この二人というのは長女草生(昭20出生)と長男布由樹(昭22出生)だろう。子どもというものは時に、全く親の存在など眼中にないような所作をする。それを③の一、二句で「なぐらるるごとき感じ」と形容したのは絶妙の表現だ。④もまた実な巧みな作品だ。子どもというものは時に親におべっかを言うような折がある。子どもなりの屈折した愛情表現の場合

もあり、子どもらしい打算や駆け引きをふくむ場合もある。潔癖な作者は「おべっかなんか言う子は嫌いだ」とやや烈しく言いさしたのである。思いがけない親のはげしい拒絶や怒りに当面した子どもの眼には、見る見る溢れるばかりに涙が溜ってゆく——そんな情景が眼に見えるような歌だ。極めて具象的にヴィヴィッドに描かれ、しかも一首全体に凜とした緊張のリズムがあり、「名詞止め」がえもいわれぬ効果を發揮していて、愛誦に堪える調べである。

⑤から⑦までは歌集『日本挽歌』(昭28)より抄出。⑤は「冬竹群」一連にある。終二には一男二女があり、「中の子」というのは前述の長男布由樹(ロシアの作家オネーギンからとった名)である。高雅な作者の心情と、聡明そうな額の広い息子の風貌がしのばれるような作である。⑥は「草生入学」二首中の一首。どちらかという子と引込思案で消極的な少女だったのだろう。そういう子どもの生にもをりをりは、感情が激して涙を浮べる折のようなものもあるだろうか——と思いやったので

ある。少女に寄せる父親の愛情が硬質な表現で詠出されている。入学を迎えた女童の日々の心のゆれを想像しているのであろう。「涙の光る」などと単純に言わないで「光る泪のごとき」と抵抗のある語法スタイルで述べているのも鋭い。⑦は「長女章生」中の一首。入学したばかりの童女が「おとうさま」と題をつけて父親の肖像を書いた。それが全くひらべったい鼻に画いてある。思わず破顔一笑している作者。下句の間投詞的詠法が面白い。

⑧と⑨は歌集『多く夜の歌』（昭36）より抄出。⑧は「賀歌」で「読売新聞八十周年」の小題がある。同新聞初出の歌だ。朝々、新聞をしごきながら配達してゆく少年の力を忘れるな、と呼びかける作者の心情にうたれる。島田修二は「作者自身は昭和八年ごろ、新聞配達をしていたことがある。へ扱きつつはその体験をも感じさせる、あたたかい表現である」（島田、前掲書）と述べている。⑨は「冬の光」一連にある。作者は冬の昼、二階に一人風邪で臥床していたらしい。フト下を見ると

子ども達が「馬跳び」遊びをしている。馬になって背中を丸めて跳ばれるのを待っている子ども。その背に漂う孤独を感じた眼は、いかにも宮柵二のものである。

(38) 大野誠夫

大野誠夫は大正三年、茨城県稲敷郡生板村（河内村）に生まれた。父は地主であった。誠夫は旧制龍ヶ崎中学卒業後、はじめ画家を志し熊岡洋画研究所を卒えたが、経済的な理由で断念。その後、全国新聞情報農業協同組合連合会の職員となった。それ以後の職歴のことは、あまり彼は書いていないので、よくわからない。

彼は昭和六年「ささがに」会員となったのが、短歌へ入った最初である。その後、「短歌至上主義」会員となり杉浦翠子に師事した。昭和十九年同誌廃刊後、翠子門を辞し、総合誌「光」に所属。昭和二十一年、常見千香夫・加藤克巳らと「鶏苑」を創刊。翌二十二年「新歌人集団」結成に参加した。二十八年「鶏苑」廃刊後、後継誌として「砂廊」を創刊、三十五年同誌を「作風」と改

題して主宰し、今日に至っている。昭和四十七年以来、熱海市に居住している。彼は「新歌人集団」の仲間たちと共に世に出た第一次戦後派歌人といわれる一人であるが、同集団の最も著名な近藤芳美を政治派・社会派的な歌人とすれば、これに対して風俗派的な歌人として颯爽と戦後歌壇に頭角を現わした。風俗詠に長じ、終戦直後の都会の虚無的で昏迷の街頭風景や世態を、人情風なロマネスクを湛えてうたった。つまり、ロマンと夢を戦後短歌に持ちこもうとしたので、虚構派とも呼ばれた。大野自身はロマン派、風俗派、モダニズム等と呼ばれることに抵抗を感じていたようであるが、戦後生活がにじみ出ている点からいえば、生活歌人ともいえよう。つまり、そこに底辺に生きる民衆の思いが、生活のかなしみを湛えつつ、明日を夢みる希求としてうたわれている。表現は多彩ではなやかであり、時に甘美であるが、一面、やや古風な抒情をも蔵し、古めかしい義理人情趣味のようなものが漂う面もある。

歌集は世評高かった『薔薇祭』（昭26）を始め、『行春

館雑唱』（昭29）、『胡桃の技の下』（昭31）や、最近の『あらくさ』（昭57）に至るまで計八冊ある。また、合著歌集『新選五人』（昭26）に出詠しているし、自選歌集『羈鳥歌』（昭46）もある。『大野誠夫全歌集』は昭和55年刊行された。このほか評論集『実験短歌論』（昭45）、自伝的なエッセイ『或る無頼派の告白』（昭56）や、入門書的な『短歌のすすめ』（昭50）、『短歌入門』（昭55）等の著書もある。

① 隠し持てるパンの破片かけらを暗がりに餓ひもじき子らの争ふらしも

② 幼きら並びて靴を磨きをり孤りの生きのすべなく勁きき

③ 煙草火を借ると寄り来し少年の髭伸びて丸め持つ妖婦伝

④ 草笛を吹き少年は沼のほとりめぐりゆく光る鮒なを刺すべく

⑤ 父われの記憶もいつか薄れゆきさびしさ匂ふ少女とならむ

⑥ 幼子の玩具の電話雨ふれる夜に聴けばしきりに蝸牛を呼べり

①から④までは『薔薇祭』所収。①と②は「いのちの笛」一連の中にあり、③は「柔い焰」一連の中にあるが、いずれも終戦後の荒廃した都会風俗の中におかれた子ども達を、まぎれもなくリアルに描出している。田村泰次郎が『肉体の門』に於いてその頃の街娼たちをクロースアップしてとらえたのと同じように——。①は浮浪児たちであるうか？ ②は「少年靴みがき」であろう。「シューシャインボーイ」と当時歌われた子ども達である。その彼等の、白日の街頭に捨身の生をさらす姿を、開き直って「勁き」と一見見えるような印象としてとらえても、しかしそれは「すべなき」ギリギリの結果なのだ、と作者は自問自答しつつ、心痛んでいるのである。③は風俗小説のひとつまのような凄味がある。④は一転して清冽な作品であり、①②③のような風俗詠的な作品と④のようなういしい作品が同じ歌集の中にあることに読者は戸惑うほどだが、④のように読者の少年

の日の郷愁を呼びおこすような清純な作品もまた、誠夫のものである。私はこの歌に例えばヘルマン・ヘッセの『車輪の下』ワッゲルム・アンターに描かれた少年の世界を想い出す。「光る鮎」という一語が強い印象を与える。この歌の前に「唇に草の葉をあてて笛鳴らす少年の群にわれは近づく」という作品もある。

⑤は『行春館雑唱』所収。「誕生日」一連の中にある。誠夫は現在の妻と結ばれる前に二度離婚歴があるが、最初の妻との間に一女があったようで、妻に引取られたらしいこの少女との別れの悲しみをうたった歌が、かなりある。これはその中の一首。⑥は歌集『胡桃の枝の下』所収。「紅梅」一連の中にある。歌意は明瞭で、ほほえましい一首である。

(お茶の水女子大学)

穴の向うの世界

立川 多恵子

少し前になるが、私は上野の都美術館に手作り絵本の
展覧会を見に行った。母親たちの力作にまじって園児の
作品と思われるものが展示されていた。その絵本の題は
『ずっこけどっすん』。地震のような大きなショックに驚
いたつねが穴に入って、いろいろな動物と出会う話で
あるが、動物の表情のゆたかき、くりひろげられる話の
面白さが私を魅了した。勿論大人が手伝ってまとめられ
たものであるが、とにかく楽しい絵本だった。このよう
な絵本を生み出す子どもたちが生活している園は、どん
な園だろうか、是非一度訪ねてみたいと思った。

しかし仕事に追われる毎日で、じっさい園を訪ねたの
は、二か月もたっていた。

崖下にある園舎は町の公民館を一時的に借りたもので
あり、二十一畳のたゞみの部屋と六坪の板の間しかない、
近代的な施設・設備のある園とはおよそおもむきを異に
するものだった。

丁度お天気がよかったので、子どもたちはみんな庭に
出て、それぞれ好きなあそびに夢中で、私のような訪問
者に積極的な関心を示す子もいなかった。

女の子は、庭先にこぼれ落ちた花びらを拾って水につ
け、一人は小枝でかきまわし、他の一人は小石でかきま
わしていた。お花で色水を作っているようにも思えた。

砂場では男の子が、異年令の子ども四、五人と山を作
ったり、池を掘ったりしていた。

子どもたちは器をもって、遠い水道から水をはこんで
何往復もしていた。

梅林をくぐって園舎の反対側に出ると、三才前後の子
どもがつみ草をしていた。私は子どもたちにカメラを向

けた。するとかたわらで自動車にのってあそんでいた子どもが、後を押していた子どもを誘ってカメラの前にやってきた。四人とも大変真面目な顔でレンズの前に立つ。

庭にはブランコが二つ、そのうちの一つは、四人のりの箱ブランコであるが、数人の子どもが、それにのってバスごっこをしている。

聞き馴れぬ駅名も聞かれる、駅に着くたび、子どもたちの間で、小ぜり合いが起る。降りる子どもがいないのだ。

昼近くなると、三才未満の子どもたちは、お迎えのお母さん、お祖母さんに連れられて帰っていく。

園長がボールを持って庭先に現われた。子どもたちに向ってボールとボールを蹴る。そういえばさっきの男の子が「サッカーやりたい」といった時、先生は「小さい子のいる時はだめ」といっていた。庭がせまいからだ、(三才未満児が降園したところで)、そこでいよいよサッカーの始まりである。

先生と子どもたちでゴールを描く。

A夫「今日は男と女でやるるか」

A子「いゝヨ、いゝヨ」

それぞれの子どもが仲間を集める。B夫は朝から園内にある器という器に砂をつめていた。そのB夫に向けて、

A夫「サッカーやるから仲間に入れ」

B夫「ほくやらないヨ」きっぱりいう。

二人はしばらくにらみ合っている。B夫は三日前に遠くの保育園から転園してきた子どもである。昨日について園にあるだけの器に砂をつめ、長いシーソーの上に乗っていた。

器に砂をつめる活動をすることで安定し、園中の器を砂で征服することによって、転園時の不安から脱しようとしているかに思われた。

サッカーといっても、それは単なるボールのけり合いであるが、子どもたちは一生懸命だった。十二時過ぎると、予め約束でもしていたのか、保母さんの「お昼にし

「ようか」の一ことで、手を洗い、お弁当の包みを持って園長保母と一緒に子どもたちは、二列に並んで、近くの廃駅めざして歩き出す。

私たちも後からついていった。目的地につくと、男の子はレールとレールの間にお弁当をひろげた。女の子と年少の男の子は、枯草の上に陣取った。

園児数 二十一名（男十名、女十一名）大人は、園長と保母（一名）助手（一名）の三名である。

子どもたちのお弁当は都会の子どもに負けないほどカラフルであった。卵やき、ソーセージ、キュウリ、私は園環境からみて、味噌のおにぎりを持ってくる子もいるのではないかと期待したが、その点では期待はずれだった。

食事は速度の早い子は十分位、B夫も十五分位で食べ終わった。男の子の中には四〇分もかけて食べる子もいた。お弁当を食べ終わった子どもから、それぞれのあそびに入る。

女の子はすゝき採りを始める。大人でも千切れないす

ゝきを上手に手折っていく。どうやって折っているのか近づいてみると、さびた針金を拾って、それでひっぱって折っている。子どもなりの生活の知恵である。そのうち二人の女の子は廃線になっている線路にまたがって、すゝきの穂を一本一本石でこすり始める。

立川「何ができるの」

B子「あのね、わ、た、お人形作るの」

子どもは黙々と仕事をつづける。他の子はすゝきを手がると、二人の子どものところへはこぶ。一時間余りで、すゝきの綿は山になった。すゝきの穂を押える指先がしなる。小石をもつ指に力が入る。根気のよさに驚く。私も幼い日こんなあそびに時間の経過することを忘れていたのを思い出す。

男の子は「しの」で剣を作る。一本、二本、三本……どの子も四、五本の剣を腰にさしはさむ。この活動には転園してきたB夫も参加していた。

そのうち一人が斜面をころころがり出す。つゞいてまた一人、先生が「剣をおいてね」と声をかける。子

どもたちは剣を友だちにあずけてころがる。中には相変らず剣をつけたまゝころがっている子もいる。

どの子の洋服にも枯草がついて、枯草模様になる。弁当と一緒に食べたC夫に促されて、B夫が初めてころがった。なかなか上手である。今のところ、何ごとにも用心深いB夫であるが、やがてこの園の子どもたちにとって、よい刺戟になってくれるにちがいない。

食後野原で心ゆくまであそんだ子どもたちは、先生の「帰ろうか」の声に、それぞれ遠くであそんでいる友だちを誘いに行く。園に戻った子どもたちは、おやつを食べると一堂に集って、先生に絵本を読んでもらう。この時は三才のE夫も、四才のC夫も首をのびして絵本をみつめる。先生は小声で静かに、静かに読みつづける。庭先ではお迎えの親たちが待っている。

子どもたちの親は、近くのセメント会社の社員が多いという。中には画家、大学の先生もいる。

私は小さな小さな園で、子どもたちと秋の日の一日を楽しく過ごすことができた。子どもたちの表情は明るかつ

た。園の子どもたちには、自由な時間、空間が十分保証されていた。先生と子ども、子どもと子どもをつなぐものは「豊かな自然」であり、「人のこころ」である。保育の原点に立ち戻った思いがした。

翌日学校で、私はこの日の経験を皆に語った。K先生が「まるで家なき幼稚園だね」という、そういうえば大正末期関西を中心に実践された橋詰良一の「家なき幼稚園」に似ている。

子ども同志の世界を尊重する、子ども同志の世界をつくる最適な場に大自然がある。広い野原、丘の上、川のほとりに子どもを集めて保育する、園舎というわくにとられないという点でよく似ている。

大正末期と現代は、教育に関して類似点が多い。私たちは現代の家なき幼稚園からいろいろ学ぶことが多いように思われた。慈父のような園長、母性的な保母、異年令の子どもと一緒に、大自然の中に融けこんで生活を共にする、現代のもっともぜいたくということができる。

(十文字学園女子短期大学)

韓国幼稚園教育(二)

— 植民地時代の様相 —

李 相 琴

韓国の日本植民地時代は一九一〇年(明治四三年)から一九四五年(昭和二〇年)の三六年間であるが一九〇五年に保護条約が締結されたときから事実上日本の支配下に置かれていた。したがって韓国の幼稚園教育は発祥の時期からすでに植民地制度下であり、その影響と制約をうけたことになる。

前回で創立期の各種幼稚園の特性をのべたので期間的には今回と重なることになるが、視点を別にして幼稚園

教育の初期から終戦までのいわゆる植民地時代の韓国幼稚園教育の実相を考察したいと思う。

1 制度と法令

韓国の教育は一九〇五年から学政参与官として一九〇七年からは次官として一九一〇年からは本格的な統治者としての日本行政により大改革が断行された。併合後は四次にわたる「朝鮮教育令」の発布と改正があり学校

規則も変っていった。もちろん日本植民地主義教育は「日本人化教育」が基本路線であったので教育令の改正ごとに「同化教育」「皇国臣民化教育」が強化されていた。

その中で幼稚園教育だけはどうか関係心圏外におかれていた。とりしまるほどの数もなく他の教育行政で手がまわらなかつたからかもしれない。これは法令の面からも明らかに指摘できる。保護政治時代の一九〇八年総督府学部によって公布された「高等女学校令」の一部として、その後一九二二年（大正十一年）に朝鮮総監府令により「幼稚園規程」が定められた。日本植民地時代中、幼稚園教育に關した法規は前後この二回に限られる。日本国内での「幼稚園教育令」（一九二六年、大正十五年）發布や改正とは関係なしと放置され疎外されている。しかし結果的には比較的干渉が少なかったので幸いしたと思われる。

まず最初の法的根拠となった高等女学校令は韓国語で発令されている。内面的には日本支配下にあったが正式

に合併される前だったので韓国政府の学部令として頒布された。内容は「高等女学校に附属幼稚園を設置することができる。官立漢城高等女学校に附属幼稚園を設置する。」^①となっている。ついで同学則として①幼児の年齢は満4才から普通学校に入学するまで、②定員は80人、③保育項目は遊戯唱歌談話及手技、④保育時間は1日5時間内、⑤保姆1人が保育する幼児は40人以下、⑥保育料は徴収しない、⑦休業日及入園、退園の節次は本校の規程を準用すると規定した。

この内容は一八九九年（明治三二年）に発令された日本幼稚園規程とほぼ同じようなものである。違う点は保育年令を日本では3才からとしているが韓国では一年ずらして4才からと決めたことである。これはほかの段階の教育にもみられる。すなわち「朝鮮人に対する教育制度は内地人に対するものとは之を別にし、朝鮮の時勢及民主に應じ漸進主義に依り教育を施す」という教育政策の根本方針による。したがって合併直後一九一一年（明治四四年）に發布された朝鮮教育令（第一次）に日本の

小学校にあたる普通学校の修業年限を四年としそれも一年短縮することができる」と差別的に規定している。

さて、その第一次朝鮮教育令には幼稚園に関する規定がなかった。法的根拠としては以前の学部令による外なかった。第二次朝鮮教育令は一九二二年に頒布されたが小学校令の中に幼稚園規程が含まれた。内容は前記した日本は幼稚園保育及設備規程（明治三二年）と同じで、記述法をすこしかえたものである。特記することは幼児の保育年令を3才からと明記したことである。これは三・一運動^②以後日本の全般政策が変更したことに起因する。この第二次朝鮮教育令で従来高等学校や高等女学校に附設されていた師範科が師範学校として独立した機関になることが認められた。新しい規定による師範学校に附属小学校及び附属幼稚園の設置ができる項目が入れられている。しかし実際には附属幼稚園設置は実現しなかった。

以上、二回にわたる法規定を韓国の幼稚園は終戦まで法的根拠とした。一九二六年（大正十五年）に日本では

幼稚園令が発布され保育項目に視察を付加したことが特記されているが韓国では何らの変化も改善もなまじくであった。

終戦前二年間は韓国内の幼稚園も日本と同様に戦時体制として保育所や託児所に転用されるか休園状態の混乱に落ち入りやがて植民地時代を終えることになるのである。

註

① この規定により前回述べた日本系幼稚園にあたる京城幼稚園が設立された。

② 一九一九年三月一日蜂起された全国的な独立運動を指す。この結果朝鮮政策は従来の武断政治を止揚し文化柔和政策にきりかえられる。教育制度も内地人と同じ修業年限に改善される政策がとられた。

2 幼稚園の普及

韓国内での幼稚園は大きくわけて日本人子弟のためのものと韓国子弟のための二通りとして考えてきた。朝鮮総督府から刊行される統計年報にも二分してある。一

九三〇年（昭和五年）に西村緑也編による朝鮮教育大観がだされたがこゝでは国語常用の幼稚園と国語を常用しない幼稚園とに区分している。もちろん国語とは日本語を意味する。

前者の分類は設立者に基準を置き後者は教育方針による分類とみることができる。しかし結果的には日本人設立幼稚園で日本語を常用し韓国人（宣教師を含めて）設立幼稚園では日本語を常用しなかったので統計はほぼ一致することになる。

一九一〇年（明治四三年）の合併まで韓国人（宣教師包含）設立の幼稚園は一ヶ所もなかった。ただ日本人子弟教育のため日本人が設立したのみであった。統監府（保護条約時代）統計は一九〇七年（明治四〇年）から集計記録されている。日本人設立幼稚園は

- 一九〇七（明四〇） 六園
- 一九〇八（明四一） 六園
- 一九〇九（明四二） 七園
- 一九一〇（明四三） 九園

となつてゐる。

韓国人設立の幼稚園は一九一三年（大正二年）四月京城府北部齊洞に設立者趙重應により設置認可を得ている。男児23人、女児7人計30人の幼児と保姆1人助手1人で始められた。設立者は当時の親日派の政客と貴族達によるものであり当初から貴族主義幼稚園として発足したものである。これが前回紹介した日本系幼稚園の京城幼稚園である。創設時から保姆として就任した日本人教師京口さだ子によれば（『婦人と子ども』十七卷）一人の幼児に附添が三人位ついていて我まゝ放題にさせていたという。京城幼稚園の年間経費は三〇人幼児につき二、六一七円ということで、同年の日本人幼稚園11園の中で最低は三〇人に一四〇円の私立幼稚園があったことや最高であった庚子記念京城幼稚園も一、二三人の幼児で年間経費を二、四九八円と計上しているのを見合わせればいかに豪華なものだったか想像されると思う。

一九一四年（大正三年）梨花学堂（梨花女子大学の前身）内に宣教師による韓国人子弟のための幼稚園が設

立された。これは貴族の子女でない韓国の幼児が保育される最初の幼稚園であった。ブラウンリー (Brownlee) というアメリカ人保姆と韓国人助手に十六人の幼児が保育された。梨花について外国宣教師による韓国人子弟教育の幼稚園が新設されていき、また韓国人設立の幼稚園も増加していった。

一九二五年 (大正十四年) の統計によれば韓国内の幼稚園児数は

韓国人	4, 461人
日本人	1, 487人

となっており

一九三五年 (昭和十年) には

韓国人	13, 522人
日本人	3, 178人

一九四二年 (昭和十七年) には

韓国人	21, 280人
日本人	6, 346人

という増加ぶりをしめている。

園数は韓国人日本人設立の区分なく合計してあるが公立幼稚園は日本人子弟保育のために設立されたものである。

一九二五年 (大正十四年)

公立幼稚園	6
私立幼稚園	88
計	94園

一九三五年 (昭和十年)

公立幼稚園	6
私立幼稚園	293
計	299園

一九四二年 (昭和十七年)

公立幼稚園	6
私立幼稚園	355
計	361園

幼稚園の普及について特記すべき興味ある傾向は私立幼稚園の設立者背景が日本人の場合仏教者が絶対多数であるのに比し韓国系の場合はキリスト教が支配的だという点である。

日本の仏教が韓国に幼稚園を設立したのは東本願寺別院、谷口派本願寺別院、浄土宗布教資園、曹洞宗、勝願

寺等である。又、宣教師設立のキリスト教は北監理派、南監理派、耶蘇教南長老、耶蘇教長老派、カナダ長老会、天主教等である。

3 教育の内容

日本人設立の幼稚園には公立幼稚園と私立の仏教系幼稚園が多数存続したがその教育内容については多くの記録が残っていない。

公立の庚子記念京城幼稚園は教育方針として「園児の発達を助成し園と家庭の連絡を図り国民教育の基礎を養成す」と記している。なをこの幼稚園ははじめ公立京城高等尋常小学校（日本人学校）校長である早川清範氏の尽力によって設立され自ら主幹として業務担当をしており園長は京城駐在の領事夫人を当て保母は大阪から招いたとなっている。また早川清範氏は一九〇二年（明治二一年）にすでに『婦人と子ども』の会員になっている（婦人と子ども第二巻四号記載）ところから察するに日本国内で実施されているもっとも新しい保育を施行したかっ

たのではなからうかと推則してみることもできる。

公立仁川記念幼稚園は幼稚園の趣旨として「幼児に適當なる保育を施して心身の健全なる発達を遂げしめ善良なる習慣を養い家庭教育を補うにあり。保育の項目は遊戯、唱歌、観察、談話、図画、手技とす」といつている。

もっともこの記録は一九三〇年（昭和五年）に刊行された「朝鮮教育大観」によるものであるからすでに「幼稚園教育会（一九二六・大正十五）」が頒布されたあとである。したがって保育項目に観察が入っているものとみ、それにしても日本人幼稚園は日本国内の保育の動向をたえず関心をもっていたことがうかゞえる。

公立仁川幼稚園では躰上の注意として次のような項目をあげている。

「 キットマモリマセウ

オツヨクナリマセウ、イヒツケラマモリマセウ、ジブソノコトハジブンデイタシマセウ、オコトバラヨクイタシマセウ、オトモダチトナカヨクイタシマセウ、」

また仏教立の幼稚園では昭和幼稚園の場合教育方針と

して、「教育と宗教を加味し教育勅語の御聖旨に基き地方子女の教養に任ず、本園は内鮮共学を以て誇りとす」となっている。

京城に所在した私立徳風幼稚園では教育方針として「明治天皇陛下の御詔勅に基き一視同仁を旨とし内鮮融和を計るを以て主旨とす」という、以上のような日本人幼稚園の教育方針はわずかな記録のなかゝらでも発見できたが日日の保育内容はあきらかでない。

前記した私立京城幼稚園は日本系の韓国幼稚園で親日派貴族の子弟を保育するため設立された。よって保育内容は日本語の教育に専念した。保姆京口さだ子は日本内地とはずいぶん違う方法で専ら国語（日本語）と日本の習慣を教えて日本人小学校に入学できるように能力をきたえようとしたという。

これらに比して韓国人子女が保育されている宣教師及び韓国人設立のキリスト教幼稚園は非常に明確な保育目標を共通的にもっていた、いわゆるキリスト教教育の思想に基礎をおいているからである。

梨花幼稚園の場合「キリスト教を土台にして幼児の成長発達に要求される適切な韓国々民を育成すること」を目標にしている。

開城にあった私立好寿敦幼稚園は「児童身体の発達に留意し児童の本性を発揮せしめ完全なる国民教育の基礎を養成するを以て保育の主眼とす」という。

仁川の永和幼稚園は「本園の教育目的は幼児の天真爛漫なる品性をキリスト主義思想にて保護育成することにおく」とする。

キリスト教保育の目的は幼児自身の天性若しくは品性を保護育成することに第一義をおくのである。すなわち人間自身が本来的にもっているものに価値をおきキリスト教精神でそれをより開発させることであつた。家庭教育を補うとか国のためになるとかいう人間外部にある価値は副次的、二義的なものとしてまずなによりも神の御子としての幼児一人一人を大切にすることであつた。

梨花幼稚園の保育目標は創立当時も現在も変わりな

い。キリスト教精神によって幼児を大切に保育するのである。これを具現するための具体的な日日の保育の内容をたどってみるとすばらしく自由な子供の遊びと活動をみる事ができる、梨花幼稚園の初期日課は

8時45分—10時 登園・くつのはきかえ・作業(自

由選択)

10時—10時30分 絵画・唱歌・律動

10時30分—11時 お手洗・おやつ

11時—11時10分 休息(床に敷物を置いてねころぶ)

11時10分—11時30分 童話・外あそび

11時30分—12時 色々な活動・遊戯・楽隊・散歩

12時 帰宅

となっている、もちろんこれは固定した時間表ではな

い。ブラウンリーがもっとも強調したことは一日の日課は都合により融通性のある変更がなければならないということだった。したがって作業とか色々な活動の時間はその日によって内容や時間に変化があるべきものとされた。その内容としては律動、遊戯、童話、恩物、教話等

をあげている。

初期キリスト教幼稚園ではやはり恩物を教育内容としてとりあげている、しかし保守的なフレイベル主義の恩物ではなく自由活動とか作業の一部として扱われたおもむきが濃い。ブラウンリーは一九一三年にシンシナティ保育学校(Cincinnati Kindergarten Training School)を卒業し、アメリカでの保守派と進歩派の保育論争をみてきたばかりであった。彼女の保育法はすこぶる進歩的であり一見遊んでばかりいるような幼稚園教育に一部の父兄は抗議を申し込むこともあったといわれる。ブラウンリーはいちはやく母の会(mothers meetings)を組織して母の教育を実施し保育法に理解と同調を得るように努力した。

一方梨花幼稚園はブラウンリーの協力者また後継者である韓国人教師が次々とアメリカ留学から帰り一九二〇年代から一九三〇年代にかけて児童中心主義保育法の基礎をかためていった。この事実が梨花幼稚園の歴史として重要であるばかりでなく韓国幼稚園教育史の核心を形

成したという点でも重大な意義をもつものである。

例えば民族系幼稚園として韓国人有志の熱意で創設された中央幼稚園（中央保育学校、中央大学の母体）も幼児指導の実際はブラウンリーが担当したり助言したり幼稚園園長は梨花学堂の校長が兼ねていた。それで中央幼稚園の保育内容も梨花幼稚園と全く同じものであった。

キリスト教系幼稚園が私立幼稚園の約75%を占めていたので多かれ少なかれ梨花幼稚園の影響をうけることになる。それは後記する教師教育制度とも関連する。

しかし一九四〇年前後から皇国臣民化教育の波は幼稚園にもおしよせて日本語の教育が追加される幼稚園もでてきた。仁川の永和幼稚園の保育課程は、文字（ハンブル・日本語）、数えかた（1から100まで・100から1000まで）、唱歌、遊戯、手工、恩物、律動、衛生、絵画となつている。文字や教えかたは二年保育児を対象にしたといふ。

4 教師教育制度の定着

終戦前までの保姆養成は四つの機関で行われた。すなわち一九一五年（大正四年）に設置された梨花幼稚園範科、一九二二年（大正十一年）に中央幼稚園に設置された中央幼稚園範科があり両校は一九二八年（昭和三年）に学制変更により共に保育学校としての認可を受けている。一九二七年（昭和二年）に平安南道平壤にあった崇義女学校に保育科が併設された、ついで一九三三年（昭和八年）には京城保育学校が設立された。崇義保育学校だけが平壤にあり三つの保育学校は京城に位置していた。四年制高等女学校卒業後進学ができる二年制保姆養成制度であった。梨花保育学校は一九四一年（昭和十六年）に梨花女子専門学校の保育科として転化し修業年限も三年になった。終戦後梨花と中央の保姆養成機関は師範大学に吸収され四年制修業年限の教師教育課程に移行する。

韓国の保姆養成機関はその数も少なく京城に集中して

いたので相互関係が密接であつた。特に教授が流動的に移籍することや講師として出講することが多かつたのである意味では同質的な教育課程が施行されたともいえる。当時梨花保育学校の一部教授は中央保育学校の授業を担当していたし中央保育学校の教授であつた幾人はあとで設立された京城保育学校の教授になつてゐる。

梨花幼稚師範科では一九一五年に設立一年目から卒業生を出している。第一期卒業生が一年修業で出たのは当初ブラウンリーの助手兼通訳であつた趙アリスが日本の活水女学院で一年間修業を終えてきたからであつた。初期幼稚師範科の教育内容は、聖書、英語、律動と遊戯、唱歌、幼稚園教授法、人之教育、手工、児童心理、体操、教育実習であつた。

保育学校の教育課程は、修身、聖書、教育学、心理学、保育学、遊戯、音楽、日本語及漢文、英語、自然科学、図画、手工、童話、実習であつた。

ブラウンリーは幼稚園の経営にも保姆としてつとめたが保姆養成にも多大な貢献をした。特に教材として多く

の訳書と編書を出した。人之教育、母の遊戯と歌、子どもの世界 (The Children's World Vol. I. II)、子供の樂園 (The Children's Paradise)、子供の国 (The Children's Garden)、そしてペティ・スミス・ヒルのコンダクト・カリキュラム等を出したのである。その中「人之教育」の訳書は一九二四年(大正十四年)とコンダクト・カリキュラムは一九三二年(昭和七年)に刊行されており日本国内での出版よりそれぞれ一年先だつてゐる。

また保姆修業年限が幼稚師範科と保育学校が高等女学校卒業後の二年間であつたこと、中斷なく継続したことで、梨花の場合だけではあるが三年制の専門学校水準になつたこと、また終戦直後四年制教師教育制度に進行した一連の発展は植民地時代においても教師の資質を高めることに尽力した韓国幼稚園教育界の矜持といえると思ふ。

5 植民地時代のある特性

本稿はじめに幼稚園教育は無関心と放置状態におかれ

ていたことを指摘しているが、それ故に同化教育、皇国臣民化教育の干渉をより少くうけたことになる。小学校、中学校、高等学校、師範学校等で日本語使用といういわゆる国語常用問題で神経質な制裁をうけているとき幼稚園の子どもは韓国語で歌うことができたのである。

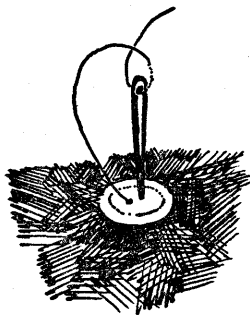
日本の幼稚園に桃太郎主義や童心主義等がいろんな形で試みられていたとき韓国の幼稚園では民族主義的な童話や童謡が語られ歌われていたのである。

洪蘭波という音楽家は東京上野音楽学校、東京高等音楽学校を経てアメリカのシェルウッド音楽大学を出た人であるが童謡作曲に魂をうちこんだ。「鳳仙花」「故郷の春」「ひるまの半月」「月見」等々、男女老少が愛唱する歌をたくさんのかしている。中央保育学校と京城保育学校で音楽を教えていた彼は子供たちに民族の歌を一曲でも多く歌えるようにと指導していた。未亡人によるともつとはかのしごとをされることもできるのに子供たちに歌ってもらう童謡を作曲することで時間をとられていたとのことである。その時代から今まで洪蘭波の歌は歌い

つがれている。

馬海松という文筆家は日本大学芸術科を経て文芸春秋社に入社し「モダン・ニッポン」を創刊して日本での活躍もはなやかな人であった。洪蘭波らと劇団同友会をつくって劇をとおして韓国の開化運動をしようとした。馬海松は子供に読んでもらい語りきかせる童話をたくさん書いた。馬海松の作品には文学性と同時につよい社会意識をふくんだものが多い。「うさぎとおさる」は韓国と日本の関係をたどえたストーリーを主題としている。

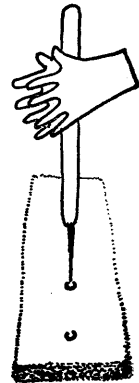
対象が幼児に限られたことではないがこのような韓国児童文化の特性はこの時代の幼稚園教育ないし保姆教育に影響したことはたしかだと思える。



(梨花女子大学校)

まわるものへの関心

秋になってから、とくによく私がつき合うようになった四才の男児Tは、まわるものが好きである。固執すると云った方がよいくらいであるが、この語を用いると、見方が固定してしまうので、私にはこの語を避けたい気持がある。毎朝、台所からはずした大きな換気扇や、玩具の小さなプロペラなどを、母親と共に手に持ってあらわれた。家には、玩具の車、車輪、ぼたんなどが、たくさん箱の中のためにある。近所のパチンコ屋から古い機械をもらってきて家に置いてあるとのことである。



津 守 真

Tは母親から離れず、私はプロペラの羽根や車輪などを媒介として一緒に遊ぶように試みていたが、不満気に低く呻っていて、何を要求しているのかわからないことがしばしばあった。何週間かたつうちに、部屋の中を私と一緒にぐるぐると円形に走りまわり、ピアノで伴奏をひくと、走りまわりながら笑うようになった。

自閉症の子どもは、まわる物を好むと云われる。この子どもは、自閉症と診断されるだろうが、保育にとっては、診断名にかかわらず、どの子どもにも、自己実現の

道を開くことが最大の課題である。まわる物に関心を持つ子どもには、まず、その関心を否定せず、そこから出発するのがよいと私には思えた。まわる運動は、反復、スピード、軸を中心とした回転などがその要素になっている。この子どもは、そのいずれも好きであることが次第に判明する。

まわるものを好むのは、この子どもだけではなく、多くの子どもに普通にみられる。お祭りの風車は魅力的である。色とりどりの風車がなかったら、お祭りの賑やかな気分は出てこない。私の娘が二才のころ、縁日で求めた風車を庭の真中に立てて、じっとみつめて動かなかったことがあった。こまも、自分の手でまわせない年令から、何十回も、まわすことをせがまれた。風車にも、子どもの玩具としての歴史と、おとなの呪術的信仰の対象としての歴史との両者がある。いずれもが示すことは、古い時代から、まわるものは子どもをも大人をも魅きつけてきたということである。現代でも同様であって、遊園地は、スピードの、あるいはゆるやかな動きの回転動

力に満ちている。

まわるものをみつめる心

ある対象をみつめるのは、そのものと同種の要素が、人間の側にすでにあるからであろう。そのものをみつめることにより、対象と同種の動きが心の中に生ずる。まわるものをみつめているとき、見る人の心は、同じように回転しているであろう。すなわち、中心をめぐって反復運動をなし、スピードが増すにつれて、精神は高揚し、興奮する。

四才のTは、その生育の歴史の中でも、心が解き放たれて精神が高揚する体験をしたことがないように思われる。生育歴の中にその事実をせんさくするまでもなく、その表情や身体の動きから、容易に察せられる。回転の動きをみつめることによって、あるいは、自らが回転の動作をすることによって、その瞬間には、まわりつく束縛から解放され、精神の高揚を感じるのではないか。

回転する空間をつくり出したとき、それは世界の他の

部分から切り離された、それ自体で充足された空間となりやすい。それ故に、それは聖なる空間ともなるし、異常な空間ともなりやすい。

本田和子は回転についての考察の中で、『子どもたちのいる宇宙』三省堂選書77、P87) 太平記に、こまで遊んでいて物狂いした少年の記事に言及し、その子どもは『俄に物に狂て、二三丈飛上々々、跳る事三日三夜也』

と云う文章を引用している。そのことを本田は、「騷擾の時代の不気味な地鳴りの中で、人々の視線は、凶兆を見るのに敏であった」と述べている。私には、ここに引用された太平記の少年と全く同じ現象が、現代の私共の周囲にあらわれているように思えて、興味深く、またおそろしい。機械化と都市化が育児環境の内部にまで浸入し、高層住宅の中で土にふれたこともなく幼児期を過ごし、幼稚園に入園するや、幼児は管理社会にとりかこまれる。「心は静かに中から働いてくるべき」(倉橋惣三、『育ての心』フレーベル新書B下、P75)であるのに、幼い子どもが、自分から発動して事をすることを許され

ない。幼児期からの障害の発生は、現代の風潮と無関係ではない。

幼稚園の観察から

このような問題ととり組んでいるとき、私は区立のK幼稚園を観察する機会があった。砂場で、数人の子どもが、スクーターをさかさまにして埋め、車輪を手で回しているのが直ちに目に映った。まわる物に関心をもつのは、私が担当している子どもだけではないことに気付かされて、私は砂場の遊びを見続けた。その子どもたちは、車輪を回しながら、スクーターの上に砂をつみ、車がかまわっても砂山がくずれないように手でかためた。それから、車輪の下に溝を掘り、水を流し、他の一群の子どもたちの溝へとつなげた。この子どもたちは、回転運動だけを見つめるのではなく、それに砂と水の素材を加え、積んだり掘ったりする活動を同時に行っていた。つまり、世界の他の部分との調和のある関連のもとで、まわる物を知覚している。

この観察をした後、養護学校でTと出会ったとき、私は、プロペラを片手に持って車を動かすTの傍に、砂をいれた容器と水とを用意した。まだTはそれで遊んだと云えないが、ちらと見てから、積木で斜面を作り、車をころがした。その午後、私はTと砂場にはいることに成功した。Tはバケツの水の中に車をいれ、その上から砂をひとつかみ落した。まわるものに砂と水の素材を加えることによって、Tの関心は一段階ひろがった。

斜面をころがす

それから数週間、Tは、つみきやレールその他で斜面をつくり、電車や自動車を斜面の上方面において手をはなすということを楽しんでした。

丁度その間に、私は三重県の二つの幼稚園を参観する機会があった。S幼稚園では、五人の男児が、車輪にボディを作った自動車をもって、コンクリートの傾斜面を走らせていた。子どもたちは互いに大声でしゃべり会いながらしばらく斜面に車を走らせ、それから車を手にも

って走りまわっていた。もうひとつのM幼稚園でも、同様にボディを原紙で作った自動車を、子どもの背丈ほどに積木をつんで作った斜面に走らせていた。その子どもたちは、それから、厚紙に赤、黄、緑の円をかいて信号機をいくつも作り、それをどこにおくかで云い合いが起った。信号機は、車の動きをコントロールする機能を果たす。この子どもたちは、車をころがして走らせることに関心を持つと共に、その動きを自らの手でコントロールする仕方をしている。際限なく回転を継続させようとする衝動のみでなく、それを自制する精神力が、子どもの遊びの中にあられる。おとなになって自己拡張の欲望がもっと大きくなったとき、それを自制するのにはもっと困難が伴う。子どもの遊びは、このような点からも、人間の精神の原型である。

Tが斜面に車をころがすのは、ようやく芽生えた自発活動である。

Tが遊びはじめる

十一月の末の一日、午前中F先生と一緒にいたTは、箱つみきを二本、自分の体の両側に立て、その間にうずくまり、それから両手で積木を外方に押し倒して立ち上り、笑った。頭の上には自動車の絵本すらのせてあった。先生たちは、桃太郎の誕生のようだと言った。この遊びを何回もくり返した。

その日の午後、Tは私と庭に出て、しばらく初冬の陽射しをたのしんでから、手に持っていたプロペラを私に渡し、赤い電車の上にもたがって、庭を動きまわった。それから、婦人用のサンダルを片方見つけて、それを歩いて歩いたり、放り投げたり、それにまたがって歩いたりした。

Tの現実の生活には、はらいのけることのできない束縛が多くあるのだろう。現実には破ることのできない殻も、つみきであれば、こわすことができる。現実の母親は、簡単には操れないが、母親のシンボルである銀色の

サンダルならば、自分の力で自由にできる。これが遊びである。Tはいまや遊びはじめた。

遊ぶこと、すなわち、自己を実現することにまでもってゆくことが保育である。Tのこの場合のように、長期にわたってみるとその過程が明瞭になるが、一日の中では変化は目立たない。けれども、少しずつの毎日の積み重ねの中で、子どもの内側に、自己を実現する過程が進行している。目立たないその時期を先に過す保育者の力は大きい。それを具体的に明かにすることは実践研究の課題である。

自閉的行動と云われるものは、固定したものではない。どんな子どもも、保育によって、その子どもなりの自己実現の活動へと導びくことができる。どんな子どもも、遊ぶことができるようになる。そのときに、自閉的行動は、もはや自閉とは云えなくなる。

私は、いま、毎日、このような子どもたちの姿を身近に見ている。
(愛育養護学校)

いろいろなことを教えてくれる子どもたち ②

村石 京子

とうもろこしやさん

私どもの幼稚園の園庭は二つの部分で出来ていて、保育室から見通せる場所は「お庭」、少し小高くなつたところにあるのは「お山」、と子どもたちは区別して呼んでいます。今回はその中で「お山」の遊びを通して書いていきたいと思います。

「お山」には樹令百年にもなろうとする巨大な銀杏の樹がそびえており、その下は一面の雑草園となっています。そこでは子どもたちは、草とりや虫とりなど

をして遊び、庭の遊びとは違った遊びがくりひろげられています。クローバーで首かざりを編んだり、兔やタ、こおろぎ、はては大きながま蛙が何匹も見つけられる遊びの宝庫として子どもたちにとって魅力ある場所となっています。

私ども保育者の眼から見ると、この山での遊び方は保育室や庭での遊びとは一味違って、日だまりの中でゆったりと三々五々展開されているのが感じられます。春はタンポポやシロツメグサの花をつんだり、秋

は大公孫樹の落としてくれる銀杏の実や山の小道の樫の実拾い、色づいた紅葉を集めたり、枝もたわわな柿の実を眺めながらその味を期待している子どもたち、この山の遊び場は現代の子どもたちの得がたい自然からの贈り物を四季折々に与えてくれるところとして、大事な保育の役割を担ってくれる場所となつています。

ところで私どもの幼稚園では、日常の保育の中では立割り学級とか、異年令集団ということを意図的に構成してはおりませんが、種々の遊びを通して自然の成り行きの中で年令の異なった子どもたちが交わつて遊ぶことがよくあります。お店屋さんごっこ、劇あそび、その他いろいろなごっこ遊びでは夫々の年令によつて夫々の役割をとつて交流しあうことが多くあります。また何気なくはじまつた遊びの中にも年令の異なつた子どもたちの接触は不断にみられています。三才児、四才児はいろいろな遊びを五才児から教えてもらつて、遊び方やその面白さを知つてを経験し、次に

は自分達でその遊びをやり出して遊びのレパートリーを広げていきますし、年長組の子どもは小さい子どもに対するいたわりや優しさを身につけ、あるいは遊びの中でリーダーシップを体験したりしています。こうした遊びを通して覚えたり、学んでいったりすることは教師が指導するものとは異なつた意味あいで、子ども達の心の中に深く残され育っていくものとなつていふと思ひます。

今日は山では丸太の上で三才児の三、四人が一軒のお店を開いています。芝の伸びてかさかさ枯れたものを丸めて焼きそばにして遊んでいます。枯れ芝から焼きそばというその柔軟な発想は、子どもは遊びを楽しくする名人として、その思いつきの素敵さを私に教えてくれます。「焼きそば一ちょう出来ました。」という呼び声で入れかわつてお客さんも来て葉っぱのお金をわたしています。「すぐ出来ますからお待ち下さい。」などという一人前のやりとりが聞こえてくると面白そうだなと思つたのか、虫とりをしていた五才児の男の

子もお店をのぞいてくれるので、焼きそばやさんははりきっています。それを見てはじめはお客さんになっていた三才児のR男はお店びらきをしなくなりましてた。

別の丸太のところですぐにもう一軒のお店が出来ました。「とうもろこしやです。」とうもろこし出来ました。ねエ、先生来て。」と呼ばれていくと、あら、まあ、本当に!! 真直ぐに伸びたおおばこの花はミニとうもろこしそっくりです。私はここでまたおおばこの花をとうもろこしに例えるその連想に嬉しくなりました。大人の眼からは見つけれられない類似性です。「本当、とうもろこしそっくりね。一本おいくらですか?」「百円です。」「おいしく焼きましたね。」と会話をかわしていると先程の五才児が二人、こちらのお店ものぞいてくれました。そして「とうもろこし下さい。」と三才児のお店やから買ったあと、私の傍へ来てそうっと言ったのです。「ねエこれ、とうもろこしに

似てるけど、本当はこれはとうもろこしじゃなくて、おすもう草っていう名前の草なんだよ。」成る程、長く伸びた二本の草を真中でからんで互にひっぱりあって遊ぶすもう遊びに使われるものです。私は一本の草に子どもの遊びにに応じて名づけられる呼び方を改めて思い起こすと同時に、おすもう草と呼んでいる五才児が、でも一生懸命遊んでいるとうもろこしやさんの遊びをこわさないように、三才児の表現を否定しないでいる心づかいを見ました。

子ども自身で考えだしていく遊びには、小さなものにも新しい創造があり、それをお互に味わいつつ、相手の遊びを生かしていくことで遊びを通して育っていくもの、人間としての成長があることを学んだものとした。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

遺伝と環境

——デュリック・フリーマンのマーガレット・ミード
批判に寄せて——

足立寿美



『ラマ、それじゃお宅ではお子さん達のつき会いには一切口出ししないわけ？ ヒンズー教について話し合う機会というのは特別にはないの？』

ラマは毎朝五時起床、一時間から二時間にわたるメデイテーションで一日の生活をはじめめるヒンズー教徒、何百年にもわたって続いているブラーメン家系出の優秀な化学者である。アメリカ政府税金監査役としてサリーの

ら、すでに十五年に近いアメリカ生活にもかかわらずインド人としての風俗習慣を保ち続ける様子に、これは矢張り何百年にもなる遺伝子を持つ力のせいかと感嘆しつつ教育方法の秘訣は何かと尋ね探る。そんな質問にラマは一度ならず「まず何よりも自分の子供といえども一人の個人である事実を目を開いていること。ヒンズー教はこうした個人がそれぞれ持つ特定の要求に基づいて生活

裾を翻して働く夫人との間に十五才の女の子と十八才の男の子がある。二人揃って学業に秀いでいるだけでなくハンバーガー、ホット・ドッグ、ピッツァといったファースト・フードが常食のティーン・エイジャーと交わりつつ菜食主義を守り、品行方正の見本であった。ここ数年、事あるごとにこの二人の成育ぶりについて見ききしなが

法と信仰を獲得していく立場に立つこと。従ってこれと
きまつた教理があるわけではなく、尊ばれる権威が存在す
るわけでもなく、寺院・教会に属することもない……”
との基本的立場を説明しては、”自分の親の立場というの
は、何よりも与えられた責任・義務を果すことにある。

献身的に全力を尽してこの行為を営むことに自分の幸わ
せがあるのであつて決してそうすることで特定の目的に
達するとか或る種の結果を求めることはない。何故なら
ば人の一生はカルマによるのだから”と云い含めるのだ
つた。十五才で祖父の選択したラマに嫁ぎ、育児に献身
した後、夫の助言に導つて高校の検定試験を受けてアメ
リカ州立大学に入学、”クラスが忙しくつて家の掃除が
行き届かないの。これでいいのかしら？”と気にしてい
る間に見事な成績で卒業して不況の中で職につけない現
役を抜くと政府税理監視人、タックス・オーディターと
の安定した職を獲得、成程中卒といつてもインドブラー
メンの教学教師を父にもちだけることはあると血統の強
さを思わされた夫人は、”ラマの云う通りよ。私はもっぱ

ら話し相手を務めるだけ”と言葉を合わせた。親の知恵
を手探りする私の脳理には”マミー、私矢張り将来医
者になるより仕方がないわ”と云いはじめた十三才の娘
の姿があつた。医者になるでなく医者になるより、おまけ
がつくのは、継父が医学部教職につく身で機会のあるこ
とに代々医者の家系なのだからとこちらの目くばせを完
全無視して将来を押し売りし、講義中にバッハをスキ
用具製造メーカーの名前と思ひ込んでいる学生とか、カ
ント・ショーペンハウワー・ヘーゲルを知らない大学院
生と接触するたびにそれこそ怒りに燃えてアメリカの教
育への批判となり環境批判となつて、娘の生活改善生活
環境コントロールと飛び出した。”読むべき本のリストを
つくつてじゅんじゅん読ませるように”、”歴史の理解な
しに数学ばかり出来た所でしようがない。学校にやらな
くてもいいから適任者を探し出して勉強させるように”、
”考える訓練、学校ではこれをどう考えているのかね”。
原則的には親としていづれも重大関心事であるもののあ
れやこれやと監視人の役を務めたくないもので、又娘を

がんじがらめに虜にしたくないものでついつい生返事をし受け身で流している中に環境をはさんでの夫婦争いとなる。親の環境づくりは娘が毎日過す学校、学校友達教師への手厳しい批判の上に成り立つのであったから彼女を孤独にし、それを憂う私はラマの助けがほしかった。

こうして対照的な男親二人のこのアメリカという生活環境の中で子供を育てていく姿勢に思いをめぐらせている最中に週刊誌、科学月刊紙が有名な人類学者マーガレット・ミードに関する記事を掲載した。数多い業績を残したこの学者のはじめの現地研究、専門書としてだけでなく一般教養書として広く今も読まれている *Coming of Age in Samoa* が未熟な研究方法の結果、現実とは無関係な社会・文化を描き出しているという。ちなみにミードのこの研究は一九二五年本の出版は一九二八年のことである。火の元は長年に渡ってサモア島で生活しその言葉にも通じて地元の人々から社会の一員として受け入れられているサモア文化の権威者デリック・フリーマン博士の書いた本だった。文化人類学者が同じ文化を

研究し現地データを集めた後、異った解釈に達することは左程稀でもなかったから「こんなことだったのか……」とかなり気軽にこの出来事を読み流していたのだが急に焦点を合わせて読み改めてみる心構えになった直接の原因は、日頃から親しいつき合いのある尊敬している学者が「私は以前から彼女の非科学的方法に疑問を感じていたのよ。まあこれでやっと……」とそれこそ鬼の首でもとったようなとの表現がピタリと合う嘲りと憎しみと勝利感の混じった笑い声のせいだった。彼女の理解しかねる反応に、一九七八年治療のしようもないまでに進行した癌を注射で痛みを押えつつ、朦朧とした時間の合い間に現われる意識の明らかな時を縫い継いで仕事のスケージュールを組む中に一生を終えたマーガレット・ミードの姿を思いつつ、長年にわたる環境を強調する研究傾向から再び遺伝というものにスポット・ライトが移動しはじめて、*sociobiology* (社会生物学) がむっくりと体を起こした現在の風潮の中で『遺伝と環境』についてあらためて注目する。

Coming of Age in Samoa と共に若キヤーガレット・

ミードは人類学者として華々しいスタートを切る。この研究が当時の「環境と発生的特質をめぐる論争」、つまり氏か育ちかをめぐる議論に見事なとどめをさすことになったからだ。ミードの仕事はこうして遺伝決定論者の口を封じると同時に文化環境論登場の機会を提供する重大な役割りを果たした。

遺伝に関する知識と人種改善に適應しようとの考えはその昔から存在した。ノーベル賞受賞者の精子を収集する人は我が家から二十分足らずの町に住んでいるのであるが、彼のアイディアを一概にけなすわけにもゆくまい。方法はともあれその考えは旧約聖書に現われブラトの『リパブリック』の中でも人間の改善にむかって常に選択のなされる社会を理想としている。云うまでもなくチャールズ・ダーウィンはこれを進化の方法とみた。この進化論に基づいて人間自らの手にその進化過程を部分的ながら方向づけてゆく力があるのではないかとほめかしたのはダーウィンの従弟である才能豊かな科学者

フランシス・ギアルトンで、彼は有名家系、双子研究を手がけその結果を統計的に処理するなどバイオニアの役割を果たした。心理学にしる社会学にしる人類学にしるまだ下地のなかった時のことだった。彼の関心はロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジの優生学講座の学者カール・ピアソンに引き継がれるのだが、優秀なこの数学者は人間の情緒精神発達に及ぼす環境の影響はゼロに近いとの立場にたつて貧困階級における出生率の高さを文明への危機とみた。ピアソンの優生学はそのままアメリカ優生学会に受け入れられ又ヒットラーによって思うままに使われる。

さてアメリカ優生学会の設立は一九二六年で白人中でも特に比欧系白人の優生を唱えた。生活環境の人間に及ぼす影響についてこれといった理論もなく測定方法のなかった時代であり、ましてそれをコントロールすることの困難さなど気のつかなかった時期である。そこで上流階級は遺伝的に優れた特性をもつのであるから当然のことと支配権を握るべきであるとの見解をとった。

遺伝決定論者の意見に真向うから對抗したのは他ならぬマーガレット・ミードの先生、フランツ・ポアズで、文化の多様性に視点を合わせた彼はそこに人間行動の複雑さの原因を求めた。つまり、人間行動はその育つていた環境によつて形造られるとの説である。『菊と刀』の著者、ルース・ベネディクトはポアズ博士の助手であった。選択的交配、淘汰によつて人種改善をねらい実際的手段として劣性を示す個人の断種、より劣つた人種グループの移民制限を唱えるのに対して反論をするためにポアズ教授は環境論を証明する材料を必要とし若い学生マーガレット・ミードがその役割を果たすことになるのであった。六冊の部厚いノート・ブックとカーボン紙、タイプ用紙にタイプライター、これにカメラを携えてサモアに到着したミードは九ヶ月の後近代社会におけるそれとは対象的な平和で穏やかな思春期を観察し寛容で自由な性への態度をみる。そうしてこれらの独特な傾向を生み出したサモア島の安易な生活振りを描いて「幾人かの恋人を持って出来るだけ長期間生活し、それから自分の

生れた村で結婚する。親の身近に生活の場を得て多くの子供を持つこと、これが皆一様に抱く夢である」との結論を出した。

育つていく環境が個人発達、特に人間的一般傾向の強くみられる思春期の特応を生み出す、これは貴重な発見である。そうして又人類学そのものを方向づけて遺伝というものから文化・社会・価値感へと研究の焦点が移つて環境の及ぼす影響というものが人間行動の理解に必須となつたのだつた。こんな風に社会的にユニークと役割を果たした研究の後、マーガレット・ミードはフロイド、ピアジェが共に原始人と子供の特質に共通点のあることを指摘する点に注目してそれでは原始人の子供達はどうなものかと次の分野にすすみ、さらに親子関係、育児様式の比較研究へと進んでいく。今や一般用語となつていくこれらの人間関係であるが当時の人類学者は子供、女というものに関心のなかつた事実を忘れてはならない。

ここで話を戻してフリーマン博士のマーガレット・ミード批判に触れておこう。彼の描くサモア島の思春期は

この時期独特の反抗的特性を示し、ピューリタンの性態度をもつ。又平和で寛容な親のかわりに子供を手荒く取扱ひ競争心の強い親が姿を現わす。フリーマンはミードとの観察の差として若い未熟な経験の欠く研究者がサモアの少女達として「外来者がみたい、ききたいと思つてゐることを察してそれを物語る」ことになったと云う。マーガレット・ミード自身、自分の処女研究にみられる欠点に生前から気付いていたことであつたようだ。

当時の様子を知らないと、博士の自伝『ブラックベリ―・ウィンター』を開いて感じることは、新しい分野から新しい分野へと次々にパイオニア的仕事を続けた学者のさすがにと思わされる線の太さと直観の鋭さである。ミードの著書は極度に専門用語の少いこと、理論が簡明であることが目につくが、自伝も又同じように大力による直断である。一つ一つ段階をふまえて厳密に計画し動きを決めるといふよりは、その嗅覚によつて大目的に体をむけると後はがむしゃらに進んでいく様を博士自身の文章で辿つてみよう。

「研究分野の選択、どの問題と取り組むかそれは私自身の決定によるのではなく最終的にはボアズ博士にあり、先生は私に思春期についての研究を望んでいました。博士は当時一つの研究方法をつくり出す政治科学者の人生の中でおこる分岐点に達していたのです。つまり、どの社会といえども孤立状態で発展するのではなく他の人間、他の社会から影響を受け異った技術水準によつて影響される事実を証明する研究は十分にされたこと、今や研究中心を個人発達において個人が育つていく特定の文化と結びつける研究課題と取り組む時期に至つたとの決定とされたのです。……………サモアに向う船の上で私は、これから取組むフィールド・ワークの重要性、又それについて書くことが持つ意味をそれこそぼんやりと認識したのです。人類学者にならうとの私自身の決心は科学者は芸術家とちがつて特別に偉大な才能に恵まれていなくとも一応の貢献の可能なこと、もう一つにはボアズ先生とルース・ベネディクトから伝つてくる一種の緊急性によるのでした。近代文化の浸入によつて世界の

中心から離れたような場所ですから生活方式が消えつつある、*“今”* 記録しておかなければそれらは永久に消えてしまう。他の問題は後に廻すことも可能だがこれだけは最も緊急を要する………所がこのフィールド・ワークについてはそれこそ何も知らなかったのです。サモアの思春期の少女達について研究することに同意した後には半時間にわたる指示を受けただけだったのです。つまり私はただじっと坐ってきくことに時間をかける心構えでいなければならぬこと、然し文化を全体的に捉えようとする民族研究に時間を浪費しないこと。こうした態度で①いかに若い女の子が慣習の加える制限コントロールに反応するか、②未開社会にみられる女性の恥じらいを示す行動、③若い女性の目ぼれ行動について観察をするようにといわれたのです。心理学でサンプルの使用法、テスト、行動の組織的記録法について知識があったとはいえ、言葉の上でのハンディキャップをかかえつつ未開社会での人間行動の記録についてきいたこともない考えられたこともない方法を見出さなければなりません

せんでした」

Coming of Age In Samoa、どうやらこの研究はフリーマン博士の批判とは別に果すべき役割を無事に務めて上げたようだ。このところ機会を掴んで「ね、どう思われますか？」と尋ねて、マーガレット・ミードを敵視する人が少くないことに気付いているが、こうした個人的感情と博士の業績とは別物であろう。文化とパーソナリティ、性格形成という問題はこの鍛まししい女学者の仕事ぬきには考えられないのであるから。

我が家の環境抵抗策はこの所一段と複雑で多様となった。ことのはじまりは他ならないラマのお嬢さんが高校にあるフェミニスト・グループに加ったせいで戦闘意識にもえ急に独立宣言的行動が現われたことによる。「一年間インドからイギリスにと……」ラマが案じる様子にかなりの鼻意気と察して同情する。こうした中で二家族揃って『ガンジー』の映画見物に出掛けると来年スタンフォード大学カルフォニア工科大学と最も難関な大学を

目指す高校生は又一段と魅力的な濃い睫毛のティーン・エイジャーになっていた。父親と母親への甘えがブンブンするさまのラマの最近の憂いはひよっとするといつまでも娘を一人占めにしておきたい男親の……とも思わないうけでもなかった。が、車に乗って間もなく成程とうなずいた。挨拶を終えると同時に、細い金のイヤリングはすつぽりとステンレスのイアーホンにおおわれる。ガンジーの無抵抗主義の現インドにおける位置について会話をしている外人三人を無視してウォークマンからきこえてくる音楽の切れ目にひょいひょいと片耳からステンレスを持ち上げてラマに話しかける。劇場に辿り着くとすぐさまポップ・コーンとコココーラを買うお金と母に手をつき出した。長い映画だからと一緒に手洗いにゆくとジューパンの後ポケットに突込んだヘアブラッシュを抜いて腰まである長い髪をすき上る。鏡の中で眼が行き合おうと心底から親し気な笑い顔をみせた。帰り途揃ってヒンズー教を信じるアメリカ若者群が経営している菜食料理店に出掛けるとそこで客が好きなものを自由に皿に

つぐキャフテリア式であった。料理にはからみのつよいものに印がつき「どうぞ自由に好きなだけ召し上って下さい。食物を捨てないですむように食べられる量だけ取って下さい」と大きなサインが出ている。家の子はなめ上げたように皿をきれいに食べ上げた。アメリカスティーン・エイジャーはつつくようにした後でかなり多量を残す。母親の注意に「だって食べてみなければ好きか嫌いかわからないじゃない？」、成程それもそうだと思う。こんな半日を過した後「ね、私と彼女の行動、同じにみえる？」と娘は父親に伺いを立てていた。

中学の校長先生から電話がかかった。「お目出とう……」といわれて娘がこの間地方賞をもらった作文がカルフォルニア州のコンテストにも入選したと知る。先生に誇りですといわれた子を前にして父親は眉をしかめるのだ、「文章はいい、情報は盛り沢山だ。但しこの中で君自身の立場とか考えを出している部分はどの位あると思う？ もう一度書き直すのだ。」沢山の大人の聴衆の前で読んだ拍手をうけてエッセイを手にした娘は勉強部屋

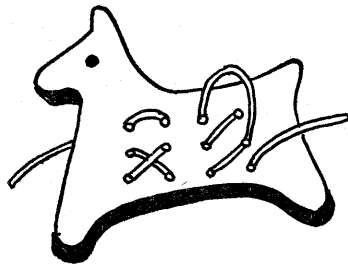
の扉を閉める。もう済んだことなのだから余程のことや
る動機がないことだろうと同情しつつ赤ん坊のことから
外界刺激に十分に反応しつつ内的安定感をガッシリと持
ち続けている生れつきの傾向に頼んで、なんとかかなり
異質の親の要求願いに損われることなく思春期を育って
ほしいと祈る気持である。

(註。この原稿を書くにあたってマーガレット・ミ
ドの著作、科学雑誌サイエンス八三のポォリス・レンズ
バーガーの原稿を参考にしました。)

☆筆者は米国在住、チェコスロバキアの医師の妻、児童
研究者。

マーガレット・ミド著『サモアの思春期』は、蒼樹書房
刊。自伝『女として人類学者として』は、平凡社から出版さ
れています。なお、マーガレット・ミド批判の書は、

Durik Freeman 著『Margette Mead and Samoa』



ニュージーランドにおける

就学前教育の歴史ならびに現状(五)



松川由紀子

四 一九五〇年、六〇年代の就学前教育

この章では、一九五〇年、六〇年代の就学前教育の発展について述べたいと思う。

この時期、フリーキンダーガルテン、プレイセンターとともに量的にも質的にもかなり発展していった。ほとんどすべての町に就学前教育サービスは拡大され、また、キンダーガルテン規定などの諸基準が定められた。そして、六〇年には、保育センター規定が設けられ、就

学前教育サービスが制度的に整備されるとともに、六〇年代末にはさらに多様なサービスが開始されていった。五〇年には、すべての三、四歳児のうち、わずか七パーセントしか就学前教育サービスを受けられなかったが、六九年には、三十九パーセントの者が何らかのサービスを受けることができるようになった⁽³⁶⁾。

(1)フリーキンダーガルテン運動の展開

四〇年代末の政府の財政援助の増大は、フリーキンダ

ーガルテン設立数の増加をもたらし、それとともに、スタッフならびに建物、設備面の全体的な水準が低下がちになっていった。キンダーガルテンの増設の割合を緩和し、スタッフの水準を改善するために、五二年、政府は、連盟と協議して、協会内のすべてのキンダーガルテンの教師が有資格でない限り、新設は認めない、という決定を出した⁽⁶⁾。しかし、ひとつのキンダーガルテンでひとつの協会をなしているような場合には、何ら効果をもたず、こうしたところは建設することができた。養成数は時々増加されていたのに、キンダーガルテンの有資格教師の数はなかなか増加しなかったために、政府も教師の給与を改定せざるをえなくなった(五五年)。しかし、五六年、事態はますます深刻になり、キンダーガルテン教師の三分の一は無資格であった。そのため、政府は、連盟と協議して、すでに承認されているものを除いて、すべて新設を認めない、という「強化期間」(二カ年)を設けた。そして、五八年以降は、連盟執行部が作成した優先リストに基づいて、増設数を制限していく政策がとられた⁽⁷⁾。

五四年に、教育省は、「フリーキンダーガルテンの敷

地、建物ならびに設備」と題するパンフレットを作成し、必要な諸基準について詳細に提示した。これは、五八年以降、すべてのキンダーガルテンに要求されることになり、さらに五九年には、キンダーガルテン規定として告示された。こうして、五八年以降、(新設時に)専用建物が義務づけられることになり、建設助成金も増加された(必要経費の三分の二が教育省によって助成された)ために、急速に独立園舎の割合が増大していった(六一年には、九十五パーセントのキンダーガルテンが専用の建物になっていた)。

しかし、六一年、キンダーガルテン教師の約三十パーセントが再び無資格になったので、連盟執行部の要請に基づいて、第二の「強化期間」が設けられた。六三年、キンダーガルテン教師協会(五三年に結成され、五八年にサービス組織として認可された)は、政府と交渉して、給与表を他の教師職と同程度のものに改善することに成功した。その結果、有資格教師が増加し、六四年に「強化期間」は解除された(六五年、無資格教師はわずか五名になった)。なお、キンダーガルテンの設置数は、五〇年には一一五カ所、六〇年には二〇〇カ所、六九年

には二九三ヵ所であった。

専用建物のキンダーガルテンが急増し、遊び空間が広くなり、設備、備品が充実していった五〇年代末には、キンダーガルテンのプログラムが従来の教師中心型のものから自由遊び中心のものへと変化していった⁽³⁹⁾。四〇年代末以降の設備に対する財政援助の増大、国によるスタッフの給与の支払い、五〇年代末の専用建物ならびに設備向上の義務化とともに、キンダーガルテンの遊び空間および収納スペースが増大し、設備、備品は充実し、自由遊びプログラムを保障していく外的条件は整えられた。それとともに、教育省の就学前教育者（四六年に任命されていたが、さらに五〇年代には三名の就学前教育助力官が任命された）による精力的な指導、助言がなされていたために、自由遊びの教育的意義が理解され、教師は子どもの自発的な遊びを導く役割になり、自由遊びプログラムが急速に定着していった。教育官たちは、フィンガーペイント、大工遊び、ならびに水、粘土、車輪などのさまざまな遊び材料の価値を説き、具体的にプログラムを提示して指導していった。自由遊びプログラムでは、子どもたちは半日のセッションのすべてをそれぞ

れが自由遊びで過ごし、自発的な遊びは全く中断されない。教師は、子どもたちの遊びの様子をみながら、ひとりひとりに必要な働きかけをしていく。子どもたちの要求があれば、時には、お話や歌を小さなグループでなすこともある。また、セッションの最後に若干そうした活動を組むこともある。

就学前教育官は、この国の就学前教育の発展に大きな役割を果たしていたために、さらに増員されていた。六三年には、就学前教育助力官が就学前教育助言者に変更され、オー克蘭ド、ウェリントン、クライストチャーチの三地域の教育事務所に各二名ずつ配置され、本省にも教育官のもとに一名任命された。彼女たちの任務は、キンダーガルテンやプレイセンタ―に政府政策を実施していくこと、協会やスタッフに専門的な指導、助言をすること、さまざまな会議に出席したり、キンダーガルテンやプレイセンタ―などを訪ねることであった。六〇年代にはさらに四名が増員された。

五〇年代、養成学生数ならびにキンダーガルテン設置数の増大とともに、養成所所長が養成面の仕事と協会内のキンダーガンの指導、監督面の仕事を遂行するこ

とはますますむつかしくなり、五七年、政府は、キンダーガルテンの指導、監督に全責任をもつ監督者の任命をオークランド協会に承認した。このため、養成所のスタッフは養成面の仕事に専念することができるようになった。当時のオークランド協会内には三十カ所のキンダーガルテンがあり、六十九名の養成学生を受け入れていた。この監督者の地位は、他の養成所のある三カ所の協会にも続いて任命されていった。

養成所は、学生数の増加とともにスタッフが増員され、養成内容は、実習重視のものが次第に理論面の教科に力点が置かれていくようになった。六〇年前後にはあいついで養成所の建物が整備され、六〇年末には新しい養成カリキュラムが採用されていった。任意団体による管理、運営は大変な重荷となり、そのため、ウェリントンの養成所では、管理、運営を協会から地域管理委員会に移した。そして、六九年には、政府がキンダーガルテン教師養成の全費用を引き受けることに同意した。当時、養成数は三〇〇名を越えていて、四カ所の養成所では、すでに限界に達していた。

なお、キンダーガルテン連盟は、放送局、教育省、通

信教育校と協力して、すでに五二年より、遠隔地の母親、子どもたちのためにキンダーガルテン放送を開始していた⁽⁴⁾。週一回二十六分間の放送は、反響が大きかったために、以後次第に放送時間が拡大され、五六年には週三回各二〇分、六三年には週五回各二〇分の放送となった。

(2) プレイセンター運動の展開

一九四八年にフリーキンダーガルテン運動と明確に分離したプレイセンター運動は、組織の性格、方針を具体化していかざるをえなくなった。運動の中心人物になっていたサマセット夫人は、五一年の中央委員会の会議で、母親たちによって運動がなされない限り、子どもたちのためになされることは少ない。と主張した。そして、夫人を中心にして、両親は就学前教育の責任者として最善であり、プレイセンターは単なる託児場所であってはならないが故に、両親参加ならびに両親教育は運動の最大の特徴である、という方針を樹立していった。この方針はパンフレットに記され、これをもとに五〇年代には小さな町にも運動は広がっていった。両親教育、両親

親参加の具体的な方法は協会によってさまざまであった。ウェリントンのように大学の公開講座を利用して両親教育を活発に展開するところがある一方で、なかなか組織ができないで、地域の実状によっては不十分なやり方しかとれないところも多かった。子どもの遊びを観察するところから両親教育は始まった。そのため、交代制の母親ヘルパーは重要な教育機能と考えられていた。そして、楽しい雰囲気での話し合いの場も両親教育のひとつとしてしばしばもたれた。各センターの管理、運営は、親たちがいろいろな情報委員、設備委員、図書委員などを分担して自発的になされた。運動が展開してまもないこの時期、両親参加保持のために、連合ならびに各協会執行部はいろいろな対策を論じ、試みていた。

また、五〇年代中葉は、教育省からキンダーガルテン運動との関係を明確にするように求められていて、組織の性格、機構を確立していくうえで重要な時期であった。連合内部に政策小委員会を設け、運動の方針、性格を論じ、キンダーガルテン連盟との間でも何回か話し合っている場をもった結果、プレイセンターはキンダーガルテンを補完するものではなく、両親教育センター機能を有

する就学前教育サービスであり、キンダーガルテン教師養成機能を使用するのではなく、地域の成人教育、労働者教育協会機能を共有することが、あらためて確認された。

プレイセンターのプログラムも、サマーセット夫人たちが自発的な遊びのもつ教育的意味を啓蒙していった結果、運動の発展につれて、急速に自由遊び中心のものになっていった。幼児は二歳半から受け入れ、三歳児ならびに四歳児で構成され、一グループは三〇名以内で、大人一名に幼児五名の割合で、指導者、指導助力者、母親ヘルパーが保育する。週に一回から三回開かれた。

オークランドでは、教育大学講師のグレイ氏 (J. Grey) を中心に、五〇年代、両親参加のセンター運営が着実に根づいていった⁽⁴⁾。氏は、母親たちは励ましがあれば学習し、子どもたちの遊び、活動のよきパートナーになることができることを実践的に確認していった。また氏は、六三年に、マオリ基金 (マオリ児童の教育を援助する目的で六一年に設立された) の就学前教育官に任命され、マオリの両親に就学前教育への関心を呼び起こすために精力的に活動し、その結果、北島には多くのプレイ

センターが設立されている。グループの親会員が指導していく、いわゆる指導者のいないセンターも多くみられた。

六〇年代になると、指導者養成プログラムが両親教育プログラムの一部に組みこまれ、全国共通の最低養成基準が導入され、以後、本格的に連合ならびに協会において、指導者養成面が取り組まれていく。しかし、協会と遠く離れた田舎にプレイセンターが設立されるにつれて、ますます連絡がむづかしくなり、両親教育、指導者養成プログラムの実施も困難になる。そのため、全国的な統一した基準は基本的なものに限られていた。また、六一年に、すべての親に対してセンター参加時に導入の講話（センターの概略、幼児の遊びについて）をすることが全国的に義務化され、順番制のヘルパー制度とともに両親教育の基本となった。その他の両親教育、指導者養成プログラムは義務制ではなく任意のものである。両親参加とはいっても母親中心のものであったために、各協会は、父親が委員会に参加するだけでなく、両親教育のプログラムや指導者養成プログラムに参加するように、週末のプログラムやセッションを用意して呼びかけ

る努力をしたりした。両親がともに子どもの遊び、発達を理解して円満な家庭生活をつくりあげていくことが、プレイセンター運動の目標であったわけである。六〇年代末には父親の指導者、指導助力者も誕生し、少しずつ父親の参加が助長されていった。

五一年、教育省はプレイセンター運動に対して本格的な助成を開始した⁽⁴⁾。連合に年額二五〇ポンド、新設センターに設立助成としてそれぞれ年額一〇ポンド、セッション維持助成として各センターに年額一五ポンド（週二回のセッションについてはさらに一〇ポンド）を交付した。この交付金は、五五年、さらに六〇年に増額されて、連合に五〇〇ポンド、設立助成は五〇ポンド、セッション維持助成は四〇ポンド（週三回以内のセッションについてはさらに各セッションごとに四〇ポンドを追加）となった。しかし、ここには、運動が相当のエネルギーをそそいでいる両親教育、指導者養成面への助成はなされていない。また、六四年の教育法によって就学前教育の責任が教育省に置かれた結果、プレイセンター運動は政府と強く結びつくことになり、六六年、連合と教育省が協議して、プレイセンターの設立、運営のための

基準が定められ、プレイセンターは助成を受けるためにこの基準を満たすことが義務づけられることになった。

こうして、プレイセンターは、フリーキンダーガルテンとともに政府より財政援助を受けながら、両親教育センターを兼ねた就学前教育の場として独自の発展を遂げた。五〇年にはわずか七一カ所しかなかったが、六〇年には一四一カ所、六九年には五二〇カ所と急速に増加していった。キンダーガルテンを設立するためには、専用建物ならびに八十名の幼児が必要で、厳格な設備、備品の基準を満たしていなければならなかったが、それに対して、プレイセンターを設立するためには、財政援助はキンダーガルテンの場合より大変に少なかったものの、建物、設備、備品の基準はゆるやかで、幼児数も三十名以内と少なかったため、比較的容易に設立することができた。しかし、設立後の指導者養成、両親教育ならびに運営には相当の親たちの自発性を要した。

(3) 保育センター制度の発足

フリーキンダーガルテンやプレイセンターとして登録されないで、個人やグループによって私的になされる就

学前教育、保育機関は、六〇年に保育センター規定が設けられたために、保育センターとして登録しなければならなくなった。七歳以下の子ども三名以上を世話する場合は、すべて保育センターとして教育児童福祉局に登録されることになったわけである（ただし、親族による世話の場合は除く）。そして、規定によってスタッフの人数が、（一日に四時間以上保育している場合）二歳児以下の幼児五名（二〇名）に大人一名（二名）、二歳児以上の幼児六名（二〇名）に大人一名（二名）と定められ、スタッフに一名でも教師資格を有する者がいればA級、いなければB級として認可された。保育センターには、主として教育をする（協会に属さない）私的なキンダーガルテンとプレイセンターならびに障害児センター、主として保育をする保育所ならびにクレッシェが含まれる。六二年、教育を主とした保育センターは一一六カ所、保育を主としたものは四六カ所あったが、六九年には、前者が一九一カ所、後者は一四一ヶ所に増加し、特に保育所ならびに障害児センターの急増が著しかった⁽⁴⁾。なお、障害をもった幼児はできる限り地域のフリーキンダーガルテンやプレイセンターで教育を受けるように統合

教育の方針が推し進められていた。

六四年に、保育センターの向上を目ざして保育センターの向上を目ざして保育センター協会が結成されたが、加盟率は高くなかった。保育プログラムの質の向上、スタッフの養成の必要など多くの問題を七〇年代に持ち越した。特に、都市部においては（とりわけオーklandでは）急増する保育所要求の問題は切実なものであった。

(4) 多様な就学前教育サービスの開始

フリーキンダーガルテンにしてもプレイセンターにしても、国によって財政援助がなされているとはいえ、設立時ならびに運営にはかなりの費用が必要であった。キンダーガルテンの場合、新設時に（建築費を含めた）全必要経費の三分の一を集めなければならなかったし、運営には寄付が必要であった。プレイセンターの場合、助成額は低かったため、かなりの寄付が必要であった。政府の認可を得るためにはいろいろな基準を満たしていなければならない、また、ヘルパーとしてセッションに参加しなければならず、プレイセンターでは両親教育に参加

するように強く励まされた。その結果、財政的に豊かでない地域、ある一定の人数の幼児を集められない田舎で教育を受けることを嫌う人々の間では、就学前教育を設立することはむづかしく、とり残されていた。また、たとえ、地域にキンダーガルテンやプレイセンターがあっても、通園する交通の便（自家用車やバス）がなければ利用できなかったし、キンダーガルテンやプレイセンターの運営のしかたやそこでの自由遊びのプログラムを好意的に思わない人々もいた。

特に、ヨーロッパ系の価値、文化が主流のキンダーガルテンやプレイセンターを嫌うマオリは、六〇年代後半より、何ら規定にとらわれないファミリープレイグループを始めていった。ファミリープレイグループは、ふつう数名の母親が幼児とともに週に一、二回、一、二時間、誰かの家や庭、集会所あるいは学校の教室などに集まり、いっしょに話したり子どもたちといっしょに遊んだりするもので、母親が同伴しているので、何ら規定、基準にしばられず、マオリ自ら欲する形でグループを続けることができ、就学前教育助言者に助言、指導を求められることもできる⁽⁴⁾。グループの数は詳細なものから

ないが、六九年には約四〇〇名位が参加しているものと推定された。

六八年に、教育者は、マオリ人口の比較的多い四地域の小学校に就学前クラスを設置し、有資格の教師を配置することを始めた。数十名の三、四歳児が週に何回か、こうしたクラスに参加することができた。

また、六九年には、政府が全費用を払って就学前教育機関を設立する優先計画が開始された。特に就学前教育を必要とする地域で、平均的収入が低く、幼児の三〇パーセント以上がマオリあるいはポリネシア系で、他に利用する就学機関のない所に全額政府負担でキンダーガルテンやプレイセンターが設置されることになった。

なお、六〇年代には、(既述したことが)北島のマオリ居住区において著しいプレイセンターの増設がみられたために、就学前教育を受けるマオリの割合も増加し、六九年には、三、四歳児のマオリの約二十九パーセントが何らかのサービスを受けていた。次第にマオリは都市ならびにその近郊に居住するようになり、ヨーロッパ系の社会に融合してプレイセンターなどの仲間とうまくやっていく場合もみられた⁽⁴⁵⁾。

上、五〇年、六〇年代の就学前教育の発展についてみてきた。任意団体ならびに教育省などの努力の結果、就学前教育サービスはかなり拡大されていったが、しかし、すべての三、四歳児のうち五名に二名がサービスを受けることができるようになっただけで、量的拡充は七〇年代に持ち越される。(山口女子大学)

註

- (36) Barney: *op. cit.*, p. 284.
- (37) Christison: *op. cit.*, p. 8.
- (38) Meade: *op. cit.*, p. 105.
- (39) Christison: *op. cit.*, pp. 24—26.
- (40) Lockhard: *op. cit.*, pp. 106—107.
- (41) Densen: *op. cit.*, pp. 99—100.
- (42) The Cory-Wright Report: *op. cit.*, pp. 5—6.
- (43) Barney: *op. cit.*, p. 319.
- (44) *Ibid.*, pp. 190—191.
- (45) Geraldine McDonald: 'Parent, playcentre and community', in Association for the Study of Childhood, *The Role of the Parent in the Education of his Child*, Wellington: New Zealand University Press, 1970.

三月は雛の月。江戸時代から続く雛人形問屋の老舗「吉徳」の御主人・山田徳兵衛氏は、倉橋惚三先生と共に、玩具教育に携った御縁からでしょう。本誌にも度々御寄稿を賜っています。また編集部が、人形はじめ羽子板の職人衆に取材を試みた折には、当代一の職人さんを紹介して下さり、そのおかげで職人衆の仕事部屋に入り込んで、どれだけ楽しい探訪が続けられたことでしょうか。かくも本誌を支えて下さった山田徳兵衛氏が、昨年の十二月二十一日に八十七歳で他界なされました。深く深く哀悼の意を捧げます。浅草橋の店を訪ねました或る折、倉橋先生の思い出話に及びました。新しい人形が出来上って、名前をつけてもらおうと、山田さんが倉橋先生に相談されたそうです。そして、二人が住んでいる地名「中野、菅野」の字をとって、「なかよし人形」が誕生したということです。ひときわ興深くお話を伺ったのは、戦

前、アメリカからの青い目の人形使節の返礼に、日本から市松人形を贈ることになった時のエピソードです。名人たちの丹念の結果、かわいらしい日本人形が生まれましたが、クレームがついたそうです。人形たちがはだしであったため、これでは失礼だというのでした。そこで急遽、人形用に小さな小さな足袋を作りはかせたというのです。それ以来、人形は足袋をはくようになつたといえます。山田徳兵衛氏は、人形、広く玩具の歴史のすぐれた研究家でもいらつしやいました。氏が御自身の経験談も貴重で、書き留めておくべきものだったと悔やまれてなりません。新春、吉徳にゆかりの腕におぼえのある職人衆は、この日のためにと腕をよりすぐって、人形製作にのぞみます。吉粋会への出品が、技の見せどころなのです。今年の吉粋会に並んだ人形は、涙が光っているではありませんまいか。(美)

幼児の教育 第八十三巻 第三号

三月号 ㊦

定価三〇〇円

昭和五十九年 二月二十五日 印刷

昭和五十九年 三月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 発行人 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

フレーベルの保育理論書

全国学校図書館協議会選定図書

フリードリッヒ・フレーベル

岡田正章編 対談者：莊司雅子・平井信義・森上史朗・野辺繁子・宍戸健夫・海 卓子・東喜代雄・白川啓子・藤井敏彦・利島知可子・西原新一・岩崎次男

幼稚園の創始者フレーベルの理論と実践を現代保育の立場から学ぼう。フレーベルは子どもの幸せのために世界で初めて幼稚園を作った人として有名ですが、その実際の姿はさまざまにいわれて誤解を招いています。本書は現在の日本保育界に活躍される先生方に、フレーベルの子ども観、教育観などをさまざまな角度から議論していただき新しいフレーベル像を浮きぼりにしました。

A5判・344頁・定価1,800円

フレーベルに還れ

長田 新／著

フレーベルの教育目標は、知識の詰め込みではなく、技術を与えることでもない。子どもが内にもっている、何かを作りだそう、表現しようとする、その力を大切にはぐくむことに力点がおかれています。商業主義と結びついた英才教育や、小学校教育を先どりした準備教育が幅をきかせている今日の幼児教育界に、警鐘をならしているかのごとくきかれるのではないのでしょうか。幼児教育の父フレーベルの教育学のエッセンスがあますところなく解説されています。

A5判・190頁・定価1,000円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

フレーベル館の8大月刊誌

内容がさらに充実!! 団体価格は、据え置きといたしました。

①—情操

キンダーブック

年少・年中児向けの絵本で、夢のある心たのしいお話は情操を豊かにし、創造力を高めます。

(ワイド画面) 団体購読価 月250円

キンダー おはなしえほん

幼児の心を生き生きと育てる美しく感動的なお話は、繰り返し読んで楽しめます。

(上製本) 団体購読価 月300円

②—観察

キンダーブック

年長児向けの絵本で、観察の眼を育て心情を豊かにする魅力いっぱいの観察絵本です。

(ワイド画面) 団体購読価 月250円

大きく見やすくなりました!!

がくしゅう おおぞら

子どもの知的欲求に答えながら、よく考える子、遊び上手な子に育てる絵本です。

(総合絵雑誌) 団体購読価 月300円

しぜん—キンダーブック③

自然のようすや、その不思議がよくわかるよう編集された好評の科学絵本です。

(上製本) 団体購読価 月300円

ころころえほん

園生活で初めてふれる、2～3歳児のための明るい絵本。幼ない子とのスキンシップが楽しめます。

(厚紙製本) 団体購読価 月220円

キンダーメルヘン

年少・年中児向けのお話絵本で、“夢とゆとり”が生まれるよう配慮されています。

(厚紙製本) 団体購読価 月220円

保育専科—今月のカリキュラム—

先生方の悩みに応える実践的な保育雑誌です。また別冊は年3回発行いたします。

定価400円 (別冊とも年間7,800円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館